



▲H7.11/12 被災



▲H8.6/24

災害関連事業
新国界橋



▲H8.6/25



▲土石流災害 H8.12/7



▲H9.5

小谷で土石流14人不明

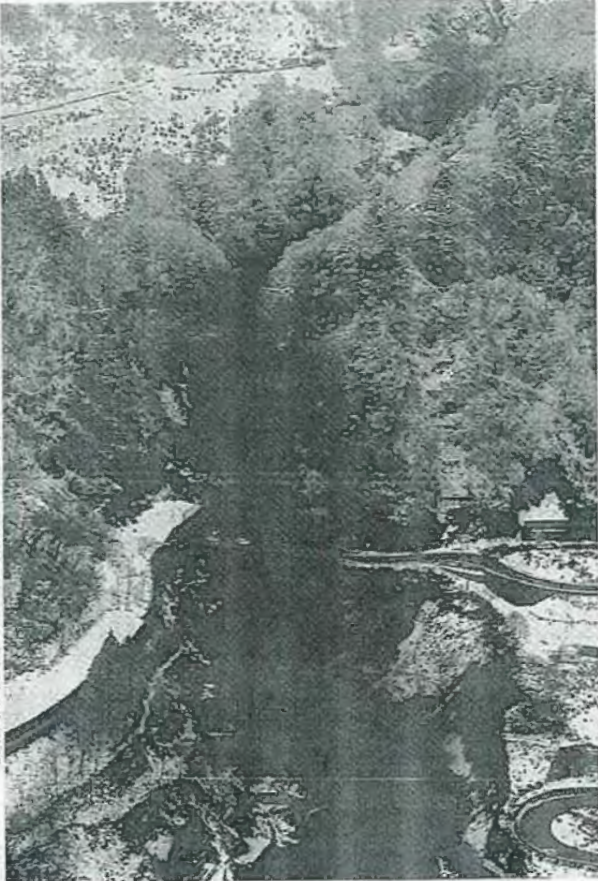
砂防工事中流され

2カ所の
作業員 4人救助 1人重体

六ヶ所市上流で、新築中の安曇小谷町界隈の蒲原沢、蒲原沢と古河川合流、国道148号沿いの上流約1.5キロの土石流災害が発生した。この災害で、作業員4人が救助された。このうち1人が重体、3人が救助された。また、新築中の作業員14人が行方不明となっている。4人が救助された。大目撃の現場と、さびた作業員約14人が救助されている。

約40人取り残される

蒲原沢の上流で、蒲原沢と古河川合流、国道148号沿いの上流約1.5キロの土石流災害が発生した。この災害で、作業員4人が救助された。このうち1人が重体、3人が救助された。また、新築中の作業員14人が行方不明となっている。4人が救助された。大目撃の現場と、さびた作業員約14人が救助されている。



蒲原沢上流から撮影した土石流の被害状況(6日午後0時15分、北北西撮影、小谷村・新築中、蒲原沢川市境付近)



いる人は、さびた作業員約14人が救助されている。このうち1人が重体、3人が救助された。

信濃毎日新聞 H8.12.6



▲蒲原沢上流部(H8.12/6)



▲蒲原沢上流部(H8.12/6)

**災害関連事業
新国界橋**



▲(H8.12/6)



▲(H8.12/6)



▲現地対策本部内



秋田県新国界橋付近の土石流現場で、人命救助を果敢とする救助隊 (7日午後1時)

小規模決壊 崩落を誘発

債大農学部助教授が分析

【秋田県】秋田県新国界橋付近で発生した土石流は、小規模な決壊が誘発した崩落によるもので、秋田県立大学農学部助教授の分析によると、崩落は、崩壊した土砂が斜面を滑り落ち、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。

崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。

崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。

崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。

崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。

崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。

崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。

崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。崩壊した土砂は、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。

姫川の流量3倍

連続降水量は基準以下...

【秋田県】秋田県新国界橋付近で発生した土石流は、連続降水量が基準以下にもかかわらず、流量が3倍に増加したと見られる。これは、斜面下部で堆積した土砂が、斜面を滑り落ち、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。

連続降水量は基準以下にもかかわらず、流量が3倍に増加したと見られる。これは、斜面下部で堆積した土砂が、斜面を滑り落ち、斜面下部で堆積し、斜面が不安定になり、崩落したと見られる。

平成8年12月6日蒲原沢土石流災害



▲(H8.12/7)



▲搜索状況(H8.12/7)



▲小谷村役場内 対応状況



災害関連事業
新国界橋



▲ 搜索状況(H8.12/8)



▲ 人海戦術による搜索



▲ 大町建設事務所内での対応状況



寄
稿

七・一一災害を想う

大町建設事務所当時の建設課長

山崎 忠宏

平成七年七月十一日から十二日、長野県北部を襲った梅雨前線豪雨は、大北管内全域の道路、河川、砂防施設に、かつて経験したことのない甚大な被害の爪痕を残した。

とりわけ、小谷村では、十一日十三時から十二日十九時までの連続雨量が、三二六ミリ、最大時間雨量は四二ミリを記録し、河川の水位は、一級河川姫川の小谷村雨中地籍で、警戒水位の二・〇メートルをはるかに超える四メートル二センチに達した。

このため、姫川中上流部、中谷川上流部では、支川において、大規模な山腹崩壊等により多量の土砂が発生し、これが本川に流出し、河床が上昇し流下能力が不足して、護岸の欠壊、道路、橋梁、鉄道等に大きな被害が生じた。

特に、JR第五姫川橋梁付近では、七・〇メートル余、姫川温泉左岸の大所川合流点付近で、一四・〇メートル近くも河床が上昇したと伝えられ、県境の横川合流点から、上流の中谷川合流点の間に、約二五〇万立の流出土砂が堆積したと推定されている。

七月十一日午後、出張先に「小谷村で異常に強い雨が降っている」「担当係員が、現地の状況を見にいったまま連絡がつかない」と事務所から連絡を受け帰庁した。その時点では、

このような大災害になろうとは予想もしなかった。帰庁したところ、国道一四八号白馬村新田から新潟県境の前面通行止めを始め、崩落、冠水、路肩欠壊、橋梁流失等による交通規制が、国道、県道の各所で行われているのをしられ、又、時間の経過とともに、各市町村から刻々と入る情報に、戸惑いさえ感じた。

直ちに、所長を中心に対策会議が開かれ、全職員を九班に編成し、災害調査と応急工事特に、交通の確保を最優先に行う。事務所への情報連絡は、随時とするが、山間部に入ると連絡の手段がないため、十時、昼食時、十五時、一日の調査終了時とする。尚応急工事は、建設業協会大北支部に全面的に協力をお願いする。この打ち合わせに基づいて、十二日より調査が行われた。

十二日、未だ雨の降り止まぬ早朝から調査に入ったが、調査が進むに従って、各調査班水防団、役場から被災状況が次第に明らかになり、被害の大きさに驚くばかりであった。応急工事用資材の要請も多く、早急に応急工事の必要な箇所が河川を含めて、六十箇所にも達したため、備蓄資材では、対応が不可能となり、建設省松本砂防工事事務所、千曲川工事事務所の資材応援をいただくような状況であった。主な道路の被災は、国道一四八号では、大町市稲毛地籍、青木湖畔の冠水、崩落土、白馬村、小谷村松沢橋の埋そく、による道路の切断、小谷村高橋洞門前後の崩落

土・路肩欠壊・平倉洞門の洗掘・社沢、小山谷、光明沢の土砂流出による道路の埋没、下寺洞門の洗掘倒壊、新国界橋の流出、県道川尻小谷系魚川線中土地区では、土砂流出による道路の埋没、路肩欠壊、が各所で発生し、その他国道でも各所で交通が寸断された。

国道一四八号は、小谷村へ通ずる唯一の幹線道路であるが、白馬村と小谷村境に位置する松沢橋の被災は、新潟県側からの交通も止まり、その上迂回路とすべき県道も被災したため、この復旧が遅れると小谷村住民の生活に支障をきたすと共に、小谷村全域の復旧作業に影響を与える恐れから、一日でも早い復旧が望まれ夜を徹して作業が行われた。

又、平倉洞門の通行止は、社沢以北の復旧が不可能となるため、工事中であった平倉トンネルを工事用道路として使用して以北の復旧作業を進めた。崩落流出土は、正に泥流で流木が混在しており、二次災害を防止しながらの作業で除去には困難を極めたが、集落の孤立解消にむけて、関係者の懸命な努力によって、大町から小谷村川尻までは、七月十七日に、下寺地籍までは、八月三日、県境までは八月六日に通行止の解除をすることができた。

一方河川では、姫川の中谷川合流点、中谷川合流点から上流部では、河床変動による基礎部の洗掘による護岸の倒壊、欠壊が多く、合流点下流部では、異常埋塞による河床の上昇、洪水中の河岸侵食による護岸の欠壊が見



7/13、(国)148号、北小谷への路線確保の為、建設中の平倉トンネルを解放。

られた。ことに、来馬から下寺、姫川温泉の埋塞が著しく、下寺では、道路復旧に合わせ河道掘削による流路変更が、壊滅的な被害を受けた姫川温泉では、台風シーズンに備えて、再度災害を防止するため約二キロの河道掘削を応急工事で行ったが、度重なる出水にも拘わらず建設業協会の努力により八月末に完了することができた。

このように、調査、応急事が進むなかで、七月二十四日から八月末日まで県下各事務所から応援の職員をいただき、更に九月一日から設計第三係、工事第三係の増設と十名の職員が増員されて、建設省・県・その他関係機関と協議を重ねながら災害査定に向けて設計積算が進められた。

災害査定は、二次査定（九月十八日）から四次査定（十二月一日）までそれぞれ一週間ずつ行われ、河川工事一五〇箇所、道路工事一一九箇所、橋梁工事五箇所、災害関連事業二箇所、災害助成事業三箇所が採択された。

査定と並行して、本復旧工事も年内発注を目指して、道路災害から順次進めら

れた。災害復旧工事は、完成に近づいておりませんが、災害発生から今日まで、早期復旧に向けて、ご協力をいただいた関係の皆様、心から感謝いたします。

災害は、忘れた頃やってくる、と言われていきます。この災害の体験を教訓として後世に伝え、更に防災意識を高めて、大北地区の皆様が、安心して生活できる、住みよい地域になることを願っております。

七・一一豪雨災害を回想して

小谷村総務課長 丸山 芳雄

平成七年七月十一日、小谷村を襲った梅雨前線豪雨災害は、いまだかつて私たちが経験した事のない、未曾有の大災害となりましたが、お陰様でこの災害による人身事故が一件もなかった事は、不幸中の幸いであり、住民の皆さんの智慧と、日頃の災害に対する心構えの賜と心から敬意を表するものであります。

私は災害発生当時、建設課長として勤務しておりました。当日は私用で休暇をいただき出かけておりましたが、午後五時頃、豪雨の降り続く中、用事を済ませて帰路についておりましたが、あまりの雨のすごさに、心配になり、役場へ立ち寄ったところ、村内のいたる所で災害がすでに発生しており、庁内はパニック状態となっております。

村内を流れる姫川をはじめ、中小河川は土石流が発生したり、国道は通行不能となった

り、通勤時間帯とも重なり大変な状況となりました。時間が経つにつれて、被害は拡大するばかりで、情報は、有線放送、N・T・Tが相次いで不通となり、村内の特に北部地域の情報が入らず、いらいらするばかりでした。

村では、一八時に「七・一一豪雨対策本部」を設置し、職員は全員それぞれの持ち場で情報の収集、関係機関への連絡調整等と、災害対策に奔走することになりました。事務室のイスを並べて、その上で仮眠する日が何日も続き、どの顔をもみてもヒゲは伸び、目だけがガラガラして、とても異様に見えました。だれ一人不満も言わず、黙々として働いてくれた姿には、頭が下がる思いでした。

道路は寸断され、人も車も通行できない状況のもとで、いかに各地区の住民の安全を確保するため、応急措置を講じるか頭を痛めました。村の消防団の皆さんは、危険を顧みず現地に入り、的確な判断により献身的ともいえる活動をいただき、混乱もなくこの災害を乗り切れたことは、改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

村民の皆さんも、この災害対策にあたり、地域住民総出の作業を続けていただきました。私たちにも「〇〇地区だが、あそこ〇〇は共同作業で〇〇したいがよろしいか？」と言った電話が、毎日の様に入るようになりました。村民の災害復興への意欲に燃える言葉に私たちは「よろしくお願ひします」としか言えません。そして電話の最後には、「皆



さんも大変だが、体につけて下さい。」と必ず労いの言葉を添えて頂きました。私たちは、この一言に本当に勇気づけられました。お陰様でこの三年間着実に復興に向けて一歩一歩前進する事ができました。

災害復旧事業等の対策につきましては、国県をはじめ、関係機関の皆さんの迅速な対応と並々ならぬご尽力により、順調に進められ被災直後には考えられなかった程、立派に整備されておりましては、感謝に耐えません。

特に村内の交通網の復旧については、いち早く対応いただき、被災後一ヶ月余りで大網姫川温泉地区への仮設道による復旧がなされ、不安な毎日を送っていた住民はじめ、村民一同大変ありがたく感謝に耐えませんでした。

今回の七・一一豪雨災害は、私たちに自然の猛威を見せつけたことは言うまでもありませんが、私たちに大きな教訓を与えてくれたように思います。私たちの生活の中で、とかく忘れがちな「人と人との心の繋がり」がいかに大切かを改めて教えてくれたと思います。この大災害でありながら人身事故は一件もありませんでしたが、その陰には地域における住民の連帯感が、お互いに助けあいながら行動した事が、事故を未然に防止

し、無事故に結びついたものと確信しております。

私自身、災害発生以来、役場から一歩も出られずに数日間、自宅はもちろん家族とも連絡が付かずにおりましたが、雨も上がり落ちついた早朝に自宅に帰ることができました。が、全員無事に元気な顔を見せてくれました。話によると、十一日の夕方、地区の世話役の人が「安全な〇〇さん宅へ全員集まるように」と廻ってきてくれたそうです。災害発生以来、数日間はそのことで過ごしたが、皆と一緒に居て心強かったとのこと。早速あいさつに何うと、居合わせた人たちは「なあに当たり前のことだ、心配しないで仕事に戻ってくれ！」と逆に励まされる結果となりました。

災害発生後は、県内はもちろん、全国の皆さんから励ましの物資等が届けられ、村内の被災者に配布されることになりましたが、なんともありがたいことです。

その後は災害復旧事業の査定を受ける準備等々、休日を返上しての作業が続きましたが、年内に災害査定が終了することができました。村の災害対策本部は、年末も近い十一月三十日に閉鎖されましたが、災害発生直後の七月十五日に過労により倒れ、入院生活を続けていた総務課長の山中稔さんが、闘病生活の甲斐もなく、十月二十日永眠されたことは、かえすがえすも残念でなりません。ただただご冥福をお祈りするばかりです。

緑豊かな自然に囲まれた小谷村を、一瞬に

して荒廃の地と化した七・一一豪雨災害は、国・県はじめ関係機関の皆さんのご努力により着実に復興しておりますが、真に緑豊かな山々と、清き流れの姫川を一日も早く取り戻すため、村民をあげて努力することが、ご支援いただいた皆様のご労苦に報いる事と改めてここに誓っております。

(当時の小谷村建設課長)

JR大系線災害復旧なる

JR西日本大系線復旧工事所長 稲谷 徹
1、はじめに

JR大系線は、信州松本市と越後糸魚川市とを結ぶ延長約105キロの白馬を中心としたスキーとリゾート、黒四アルペンルートなど観光路線として重要な鉄路である。その内、南小谷から糸魚川方約35キロがJR西日本管内で非電化区間となっており、運行列車形態も人の流れも必然的に変わっている。

今回、平成7年7月の未曾有の豪雨災害で被災したJR大系線西日本管内の災害から復旧までの話題を紹介いたします。

2、当日(11日)

朝から中土駅付近トンネルを検査のため、糸魚川を車で出た保守区員5名は、昼過ぎ頃から降りだした雨でみるみる姫川の水位が上昇し、橋梁の警戒水位に達したため列車抑止手配を取り機子を窺っていたところ、JR電話も午後6時頃には不通(橋梁流失で断線のため)となり、現地社員の安否が気遣われ、一時は濁流に飲み込まれたのではとの不安もよぎったが、翌日のTV報道に孤立した住民救出へリコプターの最後の便に住民の誘導を終えて乗り込む社員2名が(後に、その内1名は大系線復旧工事所勤務となった)。映り、約24時間ぶりようやく安否の確認がとれたとの事であった。一方の3名は降雨が激しくなってきたため、平岩より上流側の線路状態

確認のため車で移動調査しての帰路で、国道148号寸断のため平岩で残る2名の区員を拾うことも連絡することも出来ず直江津経由で翌日帰区している。

3、復旧工事

現場事務所は、短期工事で経費節減とあって、取り壊し寸前のJR施設の余剰建物を改装人居することになり、雑草の生い茂る取り付け市道も、糸魚川市に舗装をお願いしたところ、速やかな対応をしていただき、平成8年4月15日に大系線復旧工事所が大阪から糸魚川に移転発足し、所員も大阪から震災復興工事経験者5名を含めて8名、金沢支社から3名の応援を得て11名のスタートとなりました。

復旧工事にあつては、長野冬季オリンピックに間に合わせるべく工事を進めるなか、6月25日の豪雨再来で、当社工事は軌道上の土砂等の支障物撤去が主な施工であったため、幸いにも手戻り等は無かったが、県河川工事の殆どが元の黙阿弥の状態を目の当たりにした時には、予定工期内で完工出来るのか危惧の念を懐かざるを得ませんでした。

その後も度重なる降雨増水で瀬替え通路、仮橋が流出する度にその思いを募らせずには居られない中、平成8年2月予想外の降雨融雪増水により、工期の厳しい折、あと4、5日でコンクリート打設するRC桁が被害を受け、鉄筋・型枠・支保工の解体撤去で一からやり直しの憂き目に遭い、多大な損害を被り

ました。

4、復旧工事完了

復旧工事完了後の運輸局等の部分検査並びに社内引継ぎ検査等、運転再開に向けてスケジュールをこなしている中、大変印象に残っている事は、復旧した軌道上を諸検査のための軌道車で移動中、沿道のガードレールから、すぐ近くの90歳に近いと思われるお婆さんが一人、身を乗り出すようにしてなんともしえぬにこやかな笑顔で拍手して見送って頂いた姿に、胸にジンとこみ上げて来たのは私だけではなかったでしょう。また、軌道測定列車・おいらん列車の運転日にはどこから情報を得たのか、全国各地から写真撮影の鉄道ファンの方々が、ここぞと思う撮影スポットに陣取って沿線を賑わしてくれました。

5、おわりに

当社は今回の災害で、1月の阪神大震災に続き未曾有の大災害を半年の間で2度も経験していますが、思い返せば厳しい施工環境のなか、自然災害の困難を克服して長野県の関係箇所の皆様方のご理解・ご支援とご協力を頂き、予定通り冬季オリンピック前に運転再開を迎えることが出来ましたことをこの紙面をお借りして厚く御礼申し上げますとともに、JR大系線(JR西日本)を益々可愛がって頂きますようお願い申し上げます。

●復旧額(天町建築事務所管内)

場 所	復旧概要	被害額(億円)
南小谷駅	土砂撤去、第四姫川橋	3・0
中土駅	梁桁・橋脚新設他	
中土駅	土砂撤去、第四姫川橋	5・9
北小谷駅	橋脚修繕他	
北小谷駅	土砂撤去、トンネル修繕	14・8
平石駅	濁沢橋梁修繕	
	第八下姫川橋梁桁・橋脚改築他	
南小谷駅	軌道、電気撤去復旧	6・0
平石駅		

合計

29・7(※被害額は当初予定額より算出)



7/12、松沢橋被災

仲間の結束に誇り

長野県建設業協会大北支部「雨がひどい。国道一四八がほとんど止まった」。第一報が入ったのは、誰にとっても忘れられない七月十一日の夕方。連絡を受けた支部長、副支部長が大町建設事務所駆けつけ、指示を受けたのが支部として最初の対応となった。

白馬村の立の間地区から北側、小谷村に向かう国道一四八号は道路が寸断状態で、即日対応できる業者に出動要請がなされた。なお降りやまぬ雨の中、明朝から幹線道路の崩落の片付け、確保に重機部隊や作業員を北上させるということである。もちろん、大町側だけに支部会員企業があるわけではなく、小谷村にも加盟か否かを問わず建設業者がいて、村内各所に現場を持っていた。彼らは、孤立状態かどうか当初は知る由もなく、激しい雨の中で独自の判断を迫られていた。

実際に、村内の業者たちは十一日夕から否も応もなく手持ちのすべての建設重機を動員周辺の道路に出動して作業を始めており、そのまま夜間作業に突入していた。大町側からの応急復旧は、孤立した形のこれら現場に合流支援する形で、一つ一つ路面にかぶった土砂、転石流木を押し退け、あるいは決壊した道路を埋め均して進められ、支援の前線は日を追って北上することになった。

小谷村各地区の孤立状態は大網地区を除い

て三、四日ほどで解消された。孤立地区からの救出や物資輸送にヘリコプターが活躍したのは、この初期のころであるが、活躍する建設重機も燃料切れの事態が迫り、ヘリに燃料を届けてもらった地区も出てきた。

国道一四八号の復旧結果からいうと、南小谷を経て川尻まで復旧させるのに六日後の十七日までかかり、県境に到達したのが八月六日。この間の幹線不通箇所は数十箇所、大きい現場だけで立の間、高橋洞門、黒沢、松沢、下里瀬など十箇所にはなつたらうか。

その一つ、松沢橋前後の復旧を例にあげると、橋脚に大きい転石や流木がひっかかり川原まで三メートルはあつた橋の下はすべて埋まってしまい。水流は手前大町側の路面をえぐり洗い流していた。最初に橋下の大石をハツパで砕いた。まだ十二、十三日のころである。引き続き、土砂を除いて水流を本来の川に戻し、それから手前の決壊した道路を盛土で埋めて車両が通れるようにした。作業はこういう手順で少しずつ前進していったのだ。

話を戻せば、雨は十二日の夕方まで降り続き、この日に支部は大町建設事務所から災害



8/3、応急工事が完了(7/14、AM3:00~車両は通行可能となる)

区域の概況調査と応急復旧を正式依頼された。その夜中十地区の十二沢の現場では、除いても除いても流れ落ちて来る泥土の除去作業中、いよいよ崩落の危険が増したことを察知した業者が、独断で下流の民家三戸に避難を勧め、中土小学校の体育館に避難させたひとコマもあった。村内各所が孤立状態となっていたこの

時点では、役場も建設事務所もすべての危険箇所までは手がまわらず、それぞれの機転で動かざるをえなかった事例である。この業者は避難民のため炊き出しを地元で依頼する気配りもみせた。

大町では、支部を対策本部として大町建設事務所との連携で役員会議が繰り返された。時には小谷の現場まで車を乗り継いでおもむき現地会議で検討を重ね、組織的な応急復旧が本格化。業者を十五地区に分けて班編成した作業も効果を発揮しはじめた。二次災害防止のため大型の捨てブロックを積み並べ、土

砂を取り除き、幹線からう回路、生活道路へと作業は前進した。フル稼働の重機オペレーターは交代でなんとか休みを取り、夜間作業を辞さなかった現場も多い。

こうして迎えた八月六日の県境までの全線開通ころには、仮復旧工事も並行して始まり、応急段階は一段落した。その後、国道一四八号が新潟県糸魚川市まで完全復旧したのは、実に十二月二十三日のことであるのだが、応急復旧の段階で、延べ何台の重機、支部内外を問わず何社の仲間たちが努力したか。精細な記録がないところが残念である。

終わりに当たって、この災害復旧対応に尽力された大町建設事務所の所長以下、職員の方々が文字どおり不眠不休の努力を続けられたことに深い感銘を受けたことをつけ加えねばならない。

このがんばりに我々も応えようと、必死に対応したことが原動力になったと思う。私達の仲間も、支部加盟か否かを問わず協力的でない者は一社もなく、私利私欲なく一晩でも早く安全を確保しなければという態度に徹したことは、さすが地元の仲間たちだなあと痛感した。今回の災害で、支部としては大町建設事務所から、小谷地区豪雨災害復旧工事労働災害防止協議会として建設業労働災害防止協会長野支部から、それぞれ感謝状をいただいたが、今回確認した建設業者の仲間の結束を長く誇りとしていきたい。

7.7 梅雨前線豪雨を振り返り見て

小谷村北小谷 平川 才司

あの大雨害から、2年半になろうとしている北小谷地区も、以前の様な静けさをとりもどした。

この度、大町建設事務所より、災害復興記念誌の、発刊にあたり起稿をたのまれましたのであの時を思い出しながらペンを取りました。あの7月11日までは、梅雨の後半にもかかわらず、たいした雨もなく、このまま梅雨が明けてくれればと願っていたのですが、11日は、朝から強い雨が降ったり、やんだりの天気でした。午後になると、ものすごい雨降りになり、それが長時間続いたので、小谷の様な地形又、土質では大変なことになると思い、私は中土の奉納の現場にいたのですが、早めに作業中止にして、家路を急いだのですが、途中曾田でも、中通りでも、山側から大量の水や泥が道路にあふれ川の様になっていた。国道に入り外沢トンネルを抜けると、杜沢、小山沢も、土石流が発生して暗渠がつまり、大量の泥水や石、流木が道路を流れて居た。石がごろごろと舗装の上を、音を立てて転がっていたが、無理やり通り、北小谷駅前まで来ると、山崩れが発生し土砂が国道に流れ出し始めていた。

私の通過後は、だれも国道を通れなかった様です。まさに間一髪で小谷橋まで来たが、姫川もこの時、5時すこし前だったと思います

があまり増水はしていなかった様に思います。雨は相変わらず強く降っていた。夜8時頃に駐在さんが、姫川の増水で小谷橋の下寺側が決壊するかも知れないので、小学校に避難する様にと連絡をして、地区内を廻った。学校へ行くともう大勢の人達が集まっていた。下寺地区の人達、県内外の人達も含め、百人以上がいる。下寺の女衆はこの人達のために、炊出しを初める。学校の給食の材料を使い、下寺地区から、米や野菜などを集めて、何とか充分ではないが、夕食になった。県外の人達は雨で、ずぶ濡れだが、着替もなく気の毒だがどうしようもなかった。毛布も集めたが充分ではなかった。お互いに眠れぬ一夜を過ごした。12日も朝から強い雨降りでした。一夜明けて見ると、下寺スノーシエッドが崩壊していた。まさかあの堅固なスノーシエッドが崩壊するとは思いませんでした。夜が明け7時頃には下寺集落側のスノーシエッドも



小谷下寺、北小谷小学校内



ヘリコプターによる、救出状況(小谷村下寺、北小谷小学校グラウンド)

崩壊した。水の恐ろしさをつくづく見せ付けられた。J.Rの線路もいたる所で、寸断されて居た。

食糧も風吹荘、農協、地区とあらゆる所から集められたが、百人以上を賄う事は出来ない。早く救援物資がほしい。下寺地区は村営水道になっていたが、地下水を汲み上げての水道だから、電気がこなければどうにもならない。学校のプールの水を湧かして、炊出しに使用した。電気も、電話も、水も、食糧もない生活が、三日間続いた。13日は雨も上がり青空がひさしぶりに顔を出した。ヘリコプターが救援物資を運んで来てくれた。避難所もこれで一安心だ。県内外の避難所に居た人達も、糸

魚川、大町と運ばれて行った。家に帰れず村外に居た人達もヘリコプターで、学校のグラウンドに帰って来た。これで北小谷地区住民がようやく、顔を合わせることが出来る事が出たが、まだ

避難所生活が続いた。この中には20日以上も避難所生活をよきなくされた人達も居た。

国道が不通のため、北小谷地区は、陸の孤島になり、生活、仕事面において、不自由な生活がしばらく続いた。年が明け日8年度は復旧工事で、多くの工事関係者が入り、懸命の復旧作業が、始まったが、6月にまたもや大雨による被害を受けた。さらに12月6日は、浦原沢において、土石流が発生し、14人の人達の人命を失った。遠く北海道の人もいた。私も救援に行ったが、見るも無残な姿で発見されるのを見て、私も同じ災害復旧工事にたずさわる者の一人として、なんともやりきれない気持ちでした。心から冥福をお祈りします。9年度になり、復旧工事も順調に進み、各現場で、その姿を見させていただきました。暮れまでは、多くの工事関係者も帰宅し、重機も見えなくなりました。被災した私達北小谷の住民は、時には危険な作業も顧みず、復旧工事にたずさわってくださった皆様に心より感謝申し上げるしたいです。これで、災害に強い小谷村を、目指して、村民一丸となり、この2年半、なにかにつけ辛抱して来た甲斐がありました。

あの避難所生活、救援物資をいただく、その状態の中から小谷村の住民は、以前よりまして、人の和、そして結束の大切さを学びました。この小さな村(小谷村)で起きた、大きな災害も、多くの犠牲を払いながら、もとの小谷村に戻りました。これからは、私達、小

谷村に住む人達で、明るく、住み良い村造りを進めることが、復旧工事にたずさわった皆様への恩返しだと思います。ありがとうございました。

平成七年豪雨災害の現況と大北生コン組合の対応の経緯

株式会社 姫川フランク

専務取締役 北村 鎌司

平成七年七月十一日午前十時より大北生コン事業共同組合において、あたかも県北部を襲った集中豪雨を予期したかのように、ゼネコンへの資材供給・安全と社員教育について役員会が昼食をとりながら、午後一時半まで真剣に話し合いがもたれた。

会議終了後、帰路につくが北に来るほど雨足が強く白馬から小谷へ入った頃は「バケツで水をあける」表現の降り方であり、車のワイパーが間に合わない。正直なところ動物的感觉が働き心の動揺を抑えることができず、隣で寝ている社長について大声をかけてしまつた。「この雨は不通の降り方と違う。危険だから作業中止命令を出さなければ」と。社長もビックリし同意する。あせれど豪雨にワイパーがきかず、見通し悪く走行ができない始末。冬季には数えきれないほどの経験はあるが雨では皆無に等しい。これが集中豪雨の始まりとは誰も予想しなかつたであろう。

ようやく会社にたどり着き心を落ちつかせ

てみるが、姫川を始め各小河川の水が一分いや一秒毎に刻々と増水、日ごろ水も流れない谷間から滝のように流れ落ちる濁流。無意識に無線機を握り、「全社員に告ぐ。集中豪雨。危険なため車両機械を安全な場所へ至急避難せよ。一刻も早く帰宅し家族や地域を守るよう。」指示を出す。時計は午後三時四十分。心の動揺は増すばかり、全員無事に帰宅帰宅ができればと願う。突然、有線放送にて消防第三分団の出動要請あり。池原地区淀沢氾濫により集落危険とのこと。間一髪、土石流を避け帰宅した社員が半数にも及んだとの事であった。北小谷方面へ行った車は国道寸断により帰宅不可能との無線あり。駅前にキーをつけ駐車させ、来馬地区の知人宅に二名の避難をお願いする。四時半頃、社員や家族の安否の確認がとれるが、有線放送はおびただしく被害や出動要請である。S部長宅に床上浸水との二度目の電話。異常な声にとは想像もしなかった。まさか下里瀬の中心までとは想像もなかった。私もとりあえず机上を片付け帰路につくが、中土駅付近全滅・下里瀬バイパスは決壊しそう・土谷川上流より鉄砲水がくるとの噂。地区内のあらゆる河川が大氾濫。まさに「雷雨天地に鳴り響き河川怒濤の如し。」恐怖に陥ったのは私ばかりでなく、全村民が同じ思いであったであろう。

安全第一・一人歩きの行動をせず最低三名以上・消防団員がいること・行く先を告げること・最小限の約束を地区内で徹底し行動す

る。被災者宅の救助に当たるが一寸先は闇であり何が起きているのか全く解らず、「せせらぎに濁流が。危険だから近寄るな。(開業七日目の福祉センター)」の一声。正直いつて手の施しようのない状況で、自分の地区内のことすら掌握できない始末であった。

すでに通信網・電気は途絶え、身内の消息すらつかめず不安の深夜を向かえ始めたころ消防団員が大声で「バイパスが決壊するので役場に緊急避難せよ」の指令に小限の持ち物で避難を始めるが、役場付近の唐沢が大氾濫。道路は土石流で賽の川原、Nスタンド前にて立ち往生。歩くことすら不可能であり、W会社の重機二台の先導にてようやくたどり着く。ホールに入れば北小谷・中土・村外の思わぬ人達の顔。親子離ればなれの現実には災害の大きさを嫌でも実感せざるを得なかった。

十二日朝方までに、続々思いもしない箇所の被害状況が伝わり、異様などよめきと家族の安否不明者が多く、雨も降り続き重苦しい空気がホール一杯に漂い、これがまさしく陸の孤島かと実感する。ただ救われたことは、



小谷村下里瀬、福祉センター被災

忘れられていた人間愛・連帯協調協力がこの村に生きていたことを実感する。災害と比較はできないが人間愛の深さに感動を覚え、大北・県内は勿論、知らない市町村からの物心両面にわたる大きな協力が支えとなり、村民が一九となり復興への気力をさらに充実させ奮い立たせる原動力になった事実は忘れることはできない。

さて、大北生コン事業協同組合として対応した主な点について若干ふれてみたい。緊急理事会を開催。被害状況の把握につとめ資材供給対策とし、隣接の安筑・松本・糸魚川の各生コン・骨材組合との会議を続けてもつが糸魚川は物理的に無理。むしろ県境に応援をとの声があり、安筑・松本から骨材の応援を受け、大北生コンが主体となって復旧工事にあたるべきとの意見であった。

この時点ではどのくらいの資材が必要か全くつかめず、この間大町建設事務所・姫川砂



H8.11、巨大なブロック製作ヤードとなった来馬河原と生コンプラント (左下)

防事務所・建設省・北安曇地方事務所・市町村について情報収集にとめるが、各役所は被害試算におおわらわで不眠不休の体制であった。九月四日県土木部管理課より小谷方面で40万8千m³の生コンが必要であり、組合で供給が可能かどうかの問い合わせがあり、対応について十九日に県庁を訪問するが、県より県関係市町村を含め44万2千m³に及び、その他直轄砂防・民間5万m³。国道関係は新潟県と調整のため不明。IRについてはなおのこと。いずれにしても増量が見込まれ、当組合試算でも56万m³をみるに至った。建設業会との話し合いも幾度か行い供給をスムーズにして欲しいとの要望であり、このような経過のなか役員会も回を重ね、役所の承諾が得られれば災害復旧現地プラ

ント建設が必要との結論に達し、大町建設事務所に相談。地元との用地の選定等具体的な対策に入り、明けて八年二月大町建設事務所の特別な配慮とご指導によりご同意をいただき、続いて建設省松本砂防事務所・地権者小谷村・建設地周辺の賛同もいただき、ようやく来馬川原を建設候補地とした。三月半ば当時二メートル以上の除雪を始め続いて測量、図面作成。

三月末日小谷村へ書類の提出。規模生コン毎時一八〇粒・骨材毎時三六〇トン。総勢五〇人程度にて対応する事にし、行政指導を受けながら本格的な準備態勢と建設が始まった。六月二十四日安全祈願と試験練りを行い、七月二日役所に書類と結果報告。実質稼働が始まり幾度か役所の立ち会いを受け、品質管理面に総力を上げ対応して来ました。

苦難の連続でありました。組合の信頼と連帯責任をもって目的が達成できたことは誠に喜ばしい事であり、この間幾多の難問にも快く協力くださった大町建設事務所・堀川砂防事務所・北安曇地方事務所・建設省松本砂防事務所、多大な迷惑にも拘わらずご助力をいただいた小谷村・地域の皆様・ゼネコンの各位、またその他関係の皆様方に感謝と御礼を申し上げまして、大災害復旧の一助になったことを組合の誇りにし、後世に伝えたいと願っております。

北小谷必急

復旧最前線

小谷村北小谷 今井力

災害発生後一週間の時間が経過しました。しかし、堀川の濁流の勢いはいくらも衰えようとはしません。無残にも崩れ落ちた下寺スノーシェッドをあざ笑うかのごとく、かつて北小谷の幹線道路として自動車が行来していたスノーシェッド内を濁流が流れています。

そんななかで急復旧工事が開始されました。

大北建設業協会の名のもとに集まった、大町白馬、そして地元の小谷村の建設業者の大型機械、バックホー、ブルドーザー、ダンブトラックが十数台集結しました。まずは、下寺島の湯間



です。左岸側を流れる川の流れを右岸側に変えるために、濁り沢との合流点より右岸側に堀川をすすめました。下寺スノーシェッド上端部から小谷橋までの上流部は川の流れを緩和するために川のセンター部に堀川がすすめられました。直径4〜5メートルの石でもゴロゴロ音をたてて流れていく川です、岩塊が多く、ましてやこの水量です、流量断面も多く取らなければなりません。なかなか思うように仕事が進みません。一服もなければ飯は立ち食い、朝から晩まで急げ急げで六日めでやっと水廻しが完了しました。しかし、荒れ狂う濁流の中での締め切りです。今日締め切れるという決断のもと完全に川の中に孤立状態になり、土砂を掘り振るバックホー、土砂

を押しまくるブルドーザー、すさまじい濁流との戦いです。激戦の末完全に締め切った時はすでに夜の八時を時計が指していました。闇の中で光る重機のライトとエンジン音、そして「ヤッター」という歓声、力強い握手の感触が今でも記憶に残ります。そして翌二十四日、まがりなりに飯々道として河床部に造った道で通行が可能となりました。

別働隊で、唐沢、塩沢、湯原トンネル、前沢、真木沢のそれぞれの箇所を土砂を片づけ、24日からは、県境の新旧界橋の復旧です。前沢から出た土砂を積み込みただひたすら蒲原沢へ盛りつけました。最初の二日間は、湯原トンネル六百メートルをバックで運びました。盛立といっても橋長約八十メートルです。まして、湯原側からの一方通行です、月がかわり五日の日にやっと開通することができました。

寸断された湯橋を復旧したくも近くに重機がありません。しかたなく、林道の奥の治山現場に向かうと重機は何か無事でした。しかし、林道は十数カ所で寸断され、その復旧をしながら降りてきた事、また、途中で燃料の補給にポリタンクでボツカをしながら進んだり、難技に事欠かず、数日間を要し、湯橋の現場に到着しました。しかし、姫川は今だ荒れ狂う濁流の勢いが治まりません。復旧するには、どうしても対岸の新潟県側へ渡らなければなりません。杖をつく様に恐る恐る濁流の中にバケツをいれては土砂をすくい、

対岸へ渡る段取りを進めました。三日がかりで対岸へ渡る事ができましたが、最後の一日は二台のバックホーで島を造り、島が移動する様に土砂をリレーして足元を固め対岸に渡り切りました。湯橋の上下流の土砂を開削し右岸側へもり立てる毎日でしたが、途中国界橋から応援が到着し8月8日には、片側一車線を確保するに至り、ようやく小谷の最深部の大網まで道路が開通し安堵感を感じました。この夜災害発生後初めて何も考えず深い眠りに入る事ができた事はいうまでもありませんでした。

災害発生直後より、今まで、水や空気のように思っていた道路の重要性を実感いたしました。道路はこの地のライフラインの最たる物と痛感いたします。特に老人世帯の多いこの地では、何だかんだの持病を抱えています。大変辛い思いをしたとは存じますが、幸いに



も、ヘリコプターで入院した人、湯橋、国界橋を歩いて渡り救急車で入院した人等など、ほんとうに大事にいたらず幸いだっと思ひ

ます。特に夜はヘリコプターも使えず道路に頼らざるを得ませんでしたから、隣近所、住民として、また、地元の建設業者として道路が通じるまでの間、つらい毎日でした。このような理由で「がんばろう、がんばろう」という言葉しかかけてやれず、結局お盆を迎えるまで一日も休まず働いてくれた人たちに感謝します。

この地に住む一人の生活者として、災害発生直後より、大勢の人々の援助、努力をいただき復興の道を歩んできた事に対し深く感謝すると共に再びこの地にこのような災害が発生しない事を念じつつ筆を置かせていただきます。

七・一一の長い一日

姫川温泉 石橋 勲

我が家は、父が姫川温泉でホテル経営を始め、本年で開業四十周年を迎えます。

平成七年七月十一日雨が降ったりやんだり
暇な日で、糸魚川市の友達の所へ散髪に。昼
頃から断続的にものすごい雨が降った。遅い
昼食をとって帰る途中、根知を過ぎた所でバ
トカーや消防の人がいて「この先道路決壊の
ため通れない」とのこと。姫川温泉へ帰るな
らIRでと言われ、根知の駅まで行き、四時
ごろ一応家へ電話。姫川の増水で温泉が止ま
ったらしい。お客様が十人余り。すぐボイラ
ーを動かすように指示し、列車に乗ったが発
車の気配はない。少々不安になり、もう一度
家へ電話。がすでに電話が通じない。あせつ
た。夜八時、駅員さんから「小滝駅の上流の
鉄橋が流失した」と知らされ愕然。仕方なく
糸魚川の義兄の所へ行き、姫川温泉の情報を
聴こうと、方々へ電話をしたりテレビを見る
が情報は全然ない。いよいよ不安になる。明
日の事を考えながらの夕食はのどを通らない。
七月十二日、朝五時起床、すぐに電話。全
く通じない。商店の閉店を待って、ヘルメッ
ト・カッパ・長靴・おにぎり等買い込み、車
を途中のスタンドに預け、消防の人に無理を
きいてもらい、根知から一四八号線を歩き始
める。約十一キロの道のりだ。小滝の手前
は道路の決壊。濁流のそばをおっかなびつく

り通りぬける。すぐ先のトンネルは水が勢い
よく流れ、大小の石で川原状態。水圧でゆれ
る大正橋を走って渡る。小滝トンネルに入っ
て思わず足がすくんだ。姫川の水面が道路よ
り一メートル近くも高い。スノーシエードの
柱の間からすごい音をたてて波が入ってくる。
泥水の臭いが鼻をつく。覚悟を決めて腰まで
水につかった。山側の一段高い歩道を、おそ
るおそる歩く。上流へ百メートル程進んだ時
歩道の穴に足を取られ、首まで水につかって
しまう。恐怖で声も出ない。必死で上流へ急
いだ。真つ暗なトンネルを通り、突付洞門ま
で来た。スノーシエードが落ちて無い。むろ
ん道路も無い。流れ落ちる滝の下を、コンク
リート製の壁にへばり付きながらがむしやりに
通り抜けた。乗り捨てられた車が何台も並ん
でいる。最後の短いトンネルを過ぎた。川の
向こうに大糸線の線路が無残にぶらさがって
いる。またしても道路が無い。目が眩む程下
までえぐられている。百数十メートルも先に
崩れ落ちた道路の端が見える。しかたなく山
越え。雑木林・カヤ場、どこをどう歩いたか
よく分からない。下りかけた時、杉の木の間
から姫川温泉の上流にあるホテルが濁流の中
に傾いている。一瞬目を疑った。うそだろ
う！思わず叫んだ。全身の力が抜けていく。
体の震えが止まらない。涙も止まらない。そ
の場に座り込んだ。気を取り直し、重い足を
ひきずりながら国道へ出た。目の前の杉林が
音をたてながら次々と姫川に飲み込まれて行

く。我が家までもうすぐだ。家は有るのか、
お客様は、家族は、町の見える所まであと少
し、いろいろな思いがこみあげ足が地につか
ない。最後のカーブを越えると、小学校の前
の高台に避難をして来た人達が勢いで一方
を見つめている。みんなの方へ歩きながら
「まだ家はあるかい？」と声をかけた。見栄な
のか意地なのか、自分で我が家の哀れな姿を
見る勇気がなかった。「また残っているが、流
れるのは時間の問題だ」と言う声が返って来
た。おそるおそる振り返った。眼下に川幅が
倍になった姫川がある。鉄橋にひっかかった
家がある。線路がぶらさがっている。昨日ま
であつた家がない。道路が流れ橋が濁流の中
に見えかくれしている。自然の猛威をまのあ
たりに見て、全身が震え頭の中が真っ白にな
った。これから先どうしたものか。ここまで
来て我が家の在る
対岸へ渡れない。
しばらくしてヘリ
コプターによつ
て、避難している
人達の糸魚川への
移送が始まった。
たまたま居合わせ
た中に無縁を持っ
た人がいて、何と
か対岸へ行かせて
欲しいと懇願す
る。何度か交信し



ヘリコプターによる、救援物資輸送状況。

ているうちにチャンスがあった。大網へ透析の必要な人を迎えに行くヘリコプターをお願いすることが出来、お陰様でようやく大網へたどり着く事ができた。避難場所へ急ぐ。お客様と家族の無事な姿を見て、嬉しさと安堵の気持ちで胸が一杯になり、何を話したかよく覚えていない。休む間もなく我が家に向かった。いまわしい現実が待っていた。建物の半分が二メートル以上も水につかり、すでに露天風呂が流れて無い。「がんばれよ！絶対に流されるなよ」我が家に向かって真剣に祈った。夕方から消防団の徹夜の警戒の任に就いた。明日から、この陸の孤島でどう生活をすればいいのか。水源が流され電気もない。電話もテレビもない。食料は何日もつのか……。あれから二年六ヶ月。この間、三度の災害にみまわれながら、今日すべての復旧を見ることができましたのも、ひとえに国をはじめ、県・村の力強いご支援、そして地元の方々のあたたかい協力のおかげと感謝の気持ちでいっぱいです。今後この地域をより一層発展させることが皆様方への恩返しとを考えて居ます。

平成七年七月十一日

小谷村大字千国三三二

今井 眞代

七月十一日は忘れる事は出来ません。十一日の二時ごろから雨足が強くなって来たので、私はいつもより早めに保育園(平岩へ

き地保育園)に迎えに行きました。

小滝から通っているお子さんもいて、そのお子さんの、お母さんが、国道一四八号線県境の新潟側で、大雨による事前規制になってしまったために、子供さんを迎えに来ることが出来なくなり、そのお母さんに「一晩預かってほしい」と、連絡をもらい、その子供さんを預かることになりました。私は、まだその時は、この大雨で災害が起こるなど予測もしていないので、子供達と「今日はみんなでキャンプの気分だね」と言っていました。子供たちもお友達が泊まるうれしさで、大はしやぎでした。

糸魚川方面に帰る知人の方達も何人か家に来ました。

長女も小学校のスクールバスで帰って来ました。長女は「国道がすごかった。」あちらこちらの小沢が崩れていたようです。

私は、大勢の人達を今夜、家に泊めるつもりで、みんなの夕飯を早めにしようと思いつつも通り、川を眺めながら食事の支度をしようとしていました。でもいつもと川が違ったのです。私達は、川沿いに住んでいたため、毎日川を見て生活していました。

米を研ぐ、数分間に、川の水が増水して来るのがわかるのです。私は恐くなりました。主人の会社に電話をしました。主人に川の水がすごい早く帰って来てほしい」と私は言ったのですが、その間にも会社の電話、有線と鳴り響きました。主人は、その対応で忙

しそうで、私の

話は、聞いていられない用でした。すぐ電話を切られてしま

い。私は、もう一度と思い電話を入れました。

もう電話が通じないので。本当に心細くなり、有線だと思

い有線を入れました。主人が出てくれました。

私「どうしよう」

主人「オレは帰れないから、自分でどうにかしろ、大事な物を持って大網(主人の実家)に行け」その後、有線も通じなくなりました。今、思い出しても切ないです。

主人に大事な物と言われたが、「子供」としか考えられなかった。子供たちを先に車に待たせ、私は、炊き立てのごはんで、おむすびを握り、家内の鍵を閉めて歩いた。一部分から川の水がドアの下から浸水して来ていました。あしがとても震え、早く外に出よう、でも小谷はどうなるのだろうか、「小谷が海」になつてしまふ、私は自分たちの命すら助かるのだろうか、不安で、必死にロープを捜す。でも見つからない、どうしよう、私は4人の



子供達を守る事ができるのだろうか、私は口
ーブを諦め車に行った。子供達も回りの様子
を察し、静に待っていた。それだけに、私は
4人を守らなくてはと思うだけでした。

大綱に着いた。電話、電気が使えなくなり
一晩じゅう雨の音、雷の音で、4人の子供達
と不安な一夜を過ごしました。

12日朝6時ごろ、養父と呼ばれた。養父は
私達の家の近くで一晩じゅう警戒していたよ
うです。養父と家に入ったが、家の窓から見
えたのが、路盤が流失して宙つりになった大
糸線の線路でした。この家も流失するのだろ
う、養父と二人で神棚に合掌して家を出まし
た。

この後、私達は家に入ることはありません
でした。こんな時、主人がいてくれたら何が
違ったかもしれないと思うのです。

でもその時は、家より子供達の方が心配で
子供達の所へすぐに戻った、午後2時ごろだ
ったと思う、家が流れたと連絡が入った。

連絡を聞いた時は、家を失った事より、子
供を守りたいと思う気持ちの方が強かった。

13日に友達の子供さんをヘリコプターに乗
せた。夕方、無線で子供さんとお母さんの手
に届いたと連絡が入った。私は、今まで、張
り詰めていた気持ちが緩み、涙が出てきた。
それと共に私達の家が流失した事に対する悲
しき、虚しさが込みあげて来た。

そんな時も主人は復旧で一生涯命だった。
何日かして、主人と夜中、無線で話が出る

様になった。仕事をしている事は、頭の中で
は理解している、でも無理だと思いがらも
主人に「帰って来てほしい」と言っていた。
主人は、仕事の日処が付くまで、会社から離
れる事が出来ないと言っていた。

9日ぶりに主人が帰って来た。やっと家族
全員揃った。皆が安心した。家は流失したが
家族一緒に居る喜びの顔を見た時に主人は復
旧工事でがんばっている私の子供達を守
らなくてはいけないと思いました。

今は、新しい家もあり、皆が元気で安心
して生活している事が、私にとって幸せです。
私達の生活は元に戻りました。災害から家族
の絆も強くなったと思います。

災害復旧に従事する

夫を持つ妻として

大田市 大塚 かおり

私は今まで、「公務員」といえば、漠然と、
役所の中の事務的な仕事というイメージしか
薄っていませんでした。しかし、大きくこの
イメージが変わったのは、夫と結婚し、一緒
に生活を共にする様になってからでした。

昨年夏の小谷村の豪雨災害のために、9月
に大町建設事務所へ転勤となり、災害復旧の
仕事の一端を担う様になりました。丁度時を
同じくして、プライベートの中でも、私たち
の結婚準備と重なった為、月曜から金曜ま
では仕事、土・日曜日は結婚式の準備と、公

私共に忙しい日々が続きました。結婚式を無
事終えるまでの数ヶ月は、主人の仕事も一番
忙しく、「盆と正月が一度に来た様な感じ」と
言っては二人で励ましあったものでした。私
自身は、会社を退職していた為に、式準備の
事だけに専念できましたが、主人は仕事の事
もあり、肉体的にも、精神的にもかなり疲労
している様子がうかがえました。結婚してか
ら毎夜帰りが遅く、「今日はこんな仕事をし
てきたんだよ。」と話を聞くものの、私自身、
仕事の内容をあまり理解できていない為に、
「もう少し早く帰ってきてくれればいいのに」
と、つい、ぐちを言ってしまうこともしばし
はありました。又、仕事で悩んでいる時も良
いアドバイスが出来ず、私自身、はがゆい思
いをすることもありました。しかし小谷村の
災害現場へ主人に連れて行ってもらい、災害
の実際を目の前にした時、被害の大きさに驚
き、仕事の大変さ、重要さを知る良い機会と
なりました。又、たとえ仕事の細かなことが
わからなくても、主人の仕事や苦勞の疲れが
軽減できる様な家庭を作っていかなければい
けないと改めて実感しました。

復旧事業が始まって早くも一年が過ぎよう
としていますが、相手が「自然」であるだけ
に、思う様にいかない部分もかなりあるとの
ことですが、一日も早い復旧を主人も私も願
っています。今後もよい仕事をしてもらおう為
に、健康管理など、主人と共に頑張っていき
たいと思っています。



H9.8、多自然型復旧により完成した中谷川。(中土小学校前)

自然の大切さを

教えてくれた豪雨災害

中土小学校六年 孫 恵三

平成七年七月十一日から、小谷村・豊野町を中心に梅雨前線による大雨が降りました。

ほくは、この大雨が降り始めた時、これがあんな被害が出るとは思いませんでした。雨が降り続いた午後四時頃、「ドドドド」という音がしたので、外を見ると教員住宅に登る坂道がアツという間に土砂で埋まってしまいました。

そこで、先生方の指導で集団下校をするこ
とになり、ほくたち山村留学生はその日、ち
ようと里親さんの家に泊まりに行く日でした。
でも、学校のとなりにある里親さんの家にと
どり着くのもやつの思いでした。

「すごい大雨だねエ。」と、里親さんと話を
しながら外を見ると、バケツの水をひっくり
返したような大雨が、ようしやなく降り続き、
そのうち停電となり、電話も通じなくなりま
した。不安な気持ちはいよいよ強まり、おそ
ろしくなってきました。

その日の夜は、雨と雷の音でなかなかねむ
ることができないまま朝になりました。

学校は、大雨で休校になりました。

外出することは、許されなかったのです。家
の周りを歩いただけでも、つい二日前まで通
学していた道がすっかり変わっていました。

中谷川は増水し中谷地区にあった管理棟は
流されて川の中になりました。学校の畑は、

全部が沢からあふれ出た土や水で埋まり、と
ても見てはられないほどでした。里親さん
と、「どうしよう。」とおろおろするばかりで
した。

ほくは、今までのあの静かだった中土が、
うそのように変わり、「自然」というのは、とて
もきびしいものだ。」と、思い知らされました。
けれども、村の人たちや地区の人たちは大災
害には、負けてはいませんでした。それに、
国や県の人たちも助けてくれ次の日から少
ずつ工事が始まっていきました。

今までに数台しか走っていなかった中土も
工事が始まってからは、一日に何十台とい
うトラックが道を行き来するようになりました。
工事が本格的になると、災害前まで草や木
の川岸だった中谷川は、少しずつコンクリ
ートの川岸になっていきました。木は切れ山
もけずられたりしました。

それを見てほくたちは、「きつと前と同じよ
うな中谷川にはもどらないのかナ。」と、思
えてきました。

そんな中、社会科の勉強で二百年に一度の
大災害の事を調べることになりました。その
うちに、復旧工事の大変さもわかってきまし
た。でも、前のように魚が手づかみでとれる
ような中谷川に戻ってほしいし、自然がいっ
ぱいある中土に戻ってほしいと思いました。

そこで大町建設事務所の方を教室におよび
して、工事の様子をうかがいました。工事の
様子を知ったほくたちは、その後、県の自然



H9.11、親水公園での植樹祭

インストラクターの方に「床止めや砂防ダムに、魚道が付いていないと魚にとっては住みにくい川になる。」と、いうことを教えてもらいました。

その後、私たちも、魚や動植物が住みよい川や山について、本や資料で調べると共に、地域の人々が復旧工事や今後の中土をどのように思っているかを、地区の三分の一の人にアンケートを取り、地域の人々の願いや考えをまとめました。それらを『災害復旧工事に對するお願い』にまとめ、大町建設事務所を訪れ、自分たちの願いを三十三項目にまとめて聞いてもらいました。その中には、「床止めに魚道を付けてほしい。」「川岸をコンクリートにしないでほしい。」「親水公園は、小さな子どもから、お年寄りまで遊べる施設にしてほしい。」などがありました。

あの忘れられない災害から三年たち、ほくたちは、六年生になりました。白

然の大切さを知った私たち

は、あの災害を忘れな

いように、卒業記念

として『わが中土思

い出の森』を残す

ことになり、秋に、

桜や広葉樹を校庭

や崩れた場所に植

樹しました。

秋のころ、中谷川

と親水公園の工事が終わ

ったのを記念して、私たち中土小学校児童と中谷保育所の子ども達が参加し、大町建設事務所の所長さんと植樹をしました。

その時に、事務所の方から、私たちが出した三十三項目の願いについて、返事をもらいました。床止めなどに魚道が付けられたり、川岸はできるだけ草にしたり、川の近くに広葉樹を植えるなど多くの願いが実現されている事を知り、自分たちがやってきた事が認められたと感し、大変うれしく思いました。

前のような中土には、もどらなかつたけど災害から新しい中土を、作り上げてきたのは、この村の人達や、大町建設事務所の所長さんを始め、事務所の皆さん、朝早くから夜遅くまで工事を進めてくださった方々のおかげだと思います。これからもあの大災害の事を忘れず中土の自然のすばらしさを守り続けていきたいです。

「予想だに……」

小谷村 山中 茂子

平成7年7月11日県の北部を襲った梅雨前線豪雨災害で、私の家族がこんな形で変貌するとは思ってもおりませんでした。

11日午後からの降りは特にひどく、夕暮れを境に各所で災害が発生し避難命令が出され、私の住む北雨中地区でも災害発生による不安で一人寝れもせず主人の帰りを待つて居りました。主人はこの時、村の総務課長の職にあつて当日夕刻に設置された災害対策本部の指揮を執つており、一睡もせず翌12日午前5時半に村役場から150メートル程の家へ一日帰宅はしたものの、家の横の様子を見ただけで再び職場へ向かいました。

12日の夜も更け13日午前3時半に帰宅し、「5時半に起こすように」と言つてすぐに休みましたが、強度の疲労と感じその時間に起こすことは出来ませんでした。6時に起こしたところ、時間に起こさなかつたことをひどく怒りましたが主人の体を考えると怒られなくてももう少し休んで欲しく思いました。

翌14日は午前2時に帰宅し、5時に出かけるとの事でした。「倒れない内にもう少し早く帰って休む訳にはいかないの」と聞くと、「皆頑張っているのに俺だけ帰れるか」……私は近くの開業医に看護婦として勤務している関係で先生にお願いして、注射器を自宅へ借りて来ており、主人の就寝中に栄養剤を点滴し

てあげることしか出来ませんでした。今回は4時50分に起し、朝の短い時間に仏前に参り、一杯のお茶と一粒の梅干を口にしただけで出かけた。その後姿は既にフラフラした状態に見えましたが、「俺は大丈夫」と言つて役場へ向いました。

日毎に早く帰宅出来るかと期待し、14日の夜は体力のつくような食事を準備して待ちましたが、15日午前1時に帰宅「今夜はおにぎりを3個も食べた」と言い、食事も摂らず床に就きました。

準備しておいた点滴を始めましたが、それも終わらない午前2時40分頃左足に激痛を伴つた筋肉痙攣が起きて独りでの歩行が困難になつてしまい、「トイレに連れて行け」と言われるも、私は主人より身長が20センチ以上も低いため肩にもかけれず、点滴を片手にもう一方で支えながら何とか行つて来ました。激痛がなかなか治まらないため、以前ゴルフの時に服用していた漢方薬1包を服用した結果漸く治まりました。

朝は5時半に起し、5時40分に出勤。「からだ、大丈夫？何かあつたらすぐ行くからね」と添えて見送りました。

私が勤務先に着いて問もない、午前7時50分頃役場から主人が吐血したとの連絡に、相沢先生をお願いして役場へ駆け付けました。

この災害の混乱の中ではありましたが、トイレ内で多量に吐血したものの、丁度居合わせ下さつた大町警察署の方々、保健婦さん

によつて、大変手際良く処置をして頂いてありがとうございました。

相沢先生は「食道静脈瘤破裂」と診断され、大町病院の先生に即座に連絡を取ってください、救急車で搬送して頂きました。担当の先生の処置を直ちに受けて、個室へ入りましたが、主人は足の筋痙攣による痛みを病棟全体に聞こえるかと思われる程の大声で訴え、暫くは大変な騒ぎでした。

私は担当の先生に呼ばれ、主人の病状は「何時とは言えない程に危険な状態」との説明を受けました。

もともと我が家は、役場から約7キロの石坂地区にありましたが、この地区は村の中でも降雪量が特に多く、積雪期には雪崩の発生によつて通行が出来なくなることがしばしばありました。こうした事情から昭和50年頃から地区の全世帯が国道の近くへもう一軒の住宅を構え、冬期間はそちらで、雪解けから11月末までは石坂で農業に携るといふ二重の生活をしております。

この時主人の両親は石坂に居りました。災害直後の道路事情の厳しい中、地区の方々を始め消防関係の方のお計らいによつて、無事に病院へ連れて来て頂きました。本当に有難うございました。

一方主人の病状は、16日夕方からは意識不明に、18日夜先生から「今夜が峠です」と言われ、一晩中2人の子供、兄弟、親戚の皆で呼び続けながら夜の明けのを待ちました。

くも
標し
けわす

皮青くも
実付炎色



故人のスケッチ集より

幸いその夜は持堪えてくれました。翌19日大町病院の先生と相沢先生の御配意によって、以前から掛かり付けでした信州大学

付属病院の清沢教授が来院され、診て頂ける事になりました。

以来少しづつ回復し、21日前、ようやく意識が戻り、この時の第一声は「母ちゃん、リンゴが食べたい」でした。

少しづつ会話も出来る様になり喜んで居りましたが、様々な方法で処置して頂いており

Myron Tan

ました出血部は、診断の結果、完全に止血出来ていないことが判明し、信州大学でなければ処置出来ないとの事で、8月7日救急車で転院の為の搬送をして頂きました。

その日の夕方からはトイレへの歩行を許可され、付き添いの必要もなく、私は久しぶりに我が家へ帰りました。

転院後暫くすると主人は病棟内で電話を掛けに行ったり、シャワーの使用が許可され、9月に入ってから、流動食を摂れる様にまで回復し、この時は皆でとても喜びました。信大へ転院して2ヶ月が経過したもの、肝機能の検査結果は依然として芳しくなく、

肝心の静脈瘤になっていく個所の処置が出来ないため、先生方は大変苦労されておられました。

10月10日に担当の先生に会った時、何時迄待っても数値が下らないからなるべく肝臓に負担がかからない方法で、12日に処置を行うとお話でした。

その夜7時信大の先生から「再出血です直ぐ来て下さい」との電話連絡があり、長男と2人病院へ急ぎました。

今回は胃の静脈瘤破裂であり、肝機能が低下しているために次々にこの様な症状が起きるとの事でした。

これ以降変化の有る度に別室へ呼ばれ「今度出血したら覚悟を」と言われましたが、清沢教授からは「生体肝移植をすれば助かる」との説明を受け、その一言に一縷の望みを抱いておりました。

12日深夜からは意識不明となって個室へ移り、14日夜には再々吐血のため呼吸器等を付けて頂きましたが、その夜も危険な状態になり、娘に小谷から主人の両親を連れて来てもらいました。

その後は、はつきりとした意識は戻りませんでしたでしたが、私達が話しかけると目で合図することもあり、興奮させない様に付き添って居りました。

18日主人と親しくして頂いている方が見えられ、目を覆っていたタオルを取り除いた瞬間、主人は「アッ」と声を発しました。

意識の不鮮明な中ではありましたが、その方が誰かを判ったのです。その方は涙ぐまれ、すぐに病室を出られました。

20日昼頃から又吸引器に血液が混じり始め、その都度ボタンを押し看護婦さんにお願いました。病室がナースステーションから離れたいた為、間に合わない時は私も吸引処置を行いました。

時間の経過と共に出血量が増加、呼吸困難に陥り、まさに最悪の状態でした。多勢の先生方が騒ぎ付け付けて下さり、あらゆる手を尽くして頂きましたが、午後3時両親・子供・兄弟・親戚の方々に見守られながら、不帰の旅へと発ちました。

主人は最後迄、自らの死は自覚していなかった様に思われます。高齢の両親を残して行くという、不安な素振りも少しもありませんでした。好きな仕事で一生を閉じた様に思われます。

98日間に及びました闘病生活と葬儀には、村長さんを始めとする小谷村と県職員の皆様方から種々御配意を賜り、また、在勤中は公私に亘って大変お世話になりました。本当に有難うございました。本欄をお借りして、心から厚く御礼申し上げます。皆様方のご健勝をお祈り申し上げます。

（小谷村副総務課長 故 山中 稔氏夫人）



小山沢から土砂流出により、乗用車まきこまれる (H7.7.11 PM5:30)

れ」と叫びながら数台の車をUターンさせた。数分後、Uターンさせた車が戻ってきた。「数百メートル南に行ったところで土石流があった。土砂が道路を塞いでいる。乗用車が一台巻き込まれた。運転手は無事だが、通行できない、何とかしろ！」。戻ってきた車を北小谷駅構内へ誘導し土砂流出場所へ走った。

土砂が流出した沢は小山沢だった。道路上は巨石を含んだ土砂で数十メートル間埋め尽くされており、約70センチ程の厚さで堆積している。乗用車は土砂流出してきた先端部とガードレールに挟まれており、沢の水は堆積した土砂の上を流れてちょうど乗用車の挟まれている位置で谷へ流れ出て徐々に路肩が崩壊していく状況であった。

雨は相変わらず強い。再び走って北小谷駅へ戻り事務所へ状況報告する「帰ることができない！」。その後、電話が不通となった。周辺の状況が解らず、線路上から姫川の状況を見るとみるみるうちに水量が増加していく

のが解るような状況であった。

周辺の様子を見渡しているとき、北小谷駅から二百メートル程北にある村道踏切の遮断機がゆっくり倒れていくのが見えたため状況を見に線路上の上を走った。それは、戸井等沢の土石流によるものだった。大量の土砂が流出していたが、その中に乗用車のテールランプが見えた。運転手は何か脱出し無事であった。お互いに大声で会話をしたが雨の音と土砂の上を流れる沢の水音で全く聞こえない、手で上にあがれと指示をするのが精一杯だった。

姫川の状態は、水量が益々増加しており、小谷橋は時折水しぶきが橋面にかかり、流れてくる巨石等による振動で落橋するのではないかと感じであった。

連絡をとる方法が全くなかったため、とりあえず小谷村役場へ戻る方法を模索した。徒歩でしか方法はないが、国道は土石流により塞がれているため、I.Rの線路伝いに行こうと初めは考えた。しかし、小谷橋の状況が振動により落橋しそうであると考えるとI.Rについても同じことだろうと思ひ、意を決して国道を戻ることにした。雨は相変わらず強く北小谷駅から歩きだして光明沢を渡りきったとき、雨の音よりも大きく地鳴りのような音がした。それは光明沢の一回目の土石流だった。下には村営住宅があったがあつたという間に飲み込まれた。誰か居るのではないかと思ったがどうしようもできない、それよりも

もうちょっとで巻き込まれたかもしれないという思いが強かった。「危ない危ないラッキーだった」と一緒に歩いている高橋さんと胸をなで下ろした。ちょうどその時の姫川は、濁流が護岸を呑み込む瞬間だった。

次は小山沢を越えなければならなかった。国道には膝上程の土砂があり、その上を沢の水が流れている。ガードレールに抑えられている土砂の上には砂防堰堤の銘板があった。砂防堰堤が壊れた？。土石流がまた起きる可能性がある、「全力で走って渡ろう」ということになり、二人共全力で走った。運良く無事小山沢部を通り抜けた。姫川は護岸も見えず、川幅がどんどん広がっていく状況だった。

外沢トンネル北坑口の手前でも土砂が流出していた。上部の田んぼが抜けたようであった。外沢トンネルはまだ電気が通っておりやつと安堵に包まれた。

国道148号 中谷川の東橋、姫川の東橋は濁流に飲み込まれて通れない。しかし、パイプ工事で川尻橋（中谷川に架かっている橋）が既に完成していたため中谷川右岸の山裾を川尻橋まで登って無事通過できた。

川尻橋下流の中谷川左岸に監督員詰め所（V現場事務所）があり、車もあつたためそれに乗り小谷村役場へ向かうことにした。現場事務所には既に人はなく避難した模様であった。すぐ脇の公衆電話から事務所へ連絡を取ろうとしたが不通だった。車で小谷村役場へ向かう途中下里瀬では消防団の人が住民の



光明沢土石流発生 (H7.7.11 PM6:00)

避難誘導及び国道を封鎖していた。土谷川の土石流に対する警戒と、下里瀬護岸欠壊の警戒のためだった。

役場近くまで来たが、役場前の唐沢が土石流により通行できない状況であった。ここで、役場まで行くことを断念し、平倉トンネルJVの職員が旅館に避難しているという情報を得てそこへ泊めてもらった。そこでは電話がまだ通じており事務所及び役場へ連絡を取り自分自身の安否と国道の状況を伝えた。(事務所ではかなり安否を心配していたようである) 7月12日

朝5時から状況把握のため、J、Vの高橋さんと共に国道を北小谷へ向かった。姫川の水量は見たこともない程多い。梶道川尻小谷系魚川線との交差点は山住洞門上の土砂崩れによって道路が塞がれている。中谷川は多少水量が落ち国道148号の東橋には土砂が被さっていたが強引に車で通過した。外沢トンネル北坑口部分は田んぼの土と思われる土砂で埋め尽くされていた。社沢でも土石流があり大量の土砂が国道を埋め尽くし通行不能であった。そこから先へは全く行ける様子ではないので、結局北小谷へ行けないまま小谷村の役場へ向かった。姫川来馬河原は、植生していた木々が全くなく、荒れ果てた状況であった。

小谷村役場へやっと到着し周辺の状況把握につとめた。役場には、自分の安否を気遣って久保田補佐、池田技師、岡本技師、水防当番だった矢口技師が昨日から来ていた。被災状況は続々と入っていた。国道は、北小谷駅前で土砂崩れ、下寺洞門の流出、各沢の土石流、新国界橋の流出、高橋洞門付近の土砂崩れ、松沢橋の流出、白馬村立ての間及び通での土砂崩れ、梶道では、川尻小谷系魚川線に至る所での道路流失、土石流による土砂流出、地滑り、奉納中土(停)線では地滑りによる通行不能状態、千国北城線では、千国集落で沢からの土石流、親沢橋での道路欠壊、白馬村楠川の瀬戸橋周辺での道路流失など、被災状況は最悪だった。小谷村は孤立状態となっていた。

久保田補佐と私は小谷村役場へ詰めて情報収集を行い、矢口技師、池田技師、岡本技師は被災した現場の状況確認へ行った。

午前9時頃、北小谷の来馬河原に従業員の宿舎を構えていた平倉トンネルJ、Vの作業員十数名が姫川の氾濫により中洲(宿舎)に取り残されているという情報が入った。梶道、消防のへりを要請したが雨が降り続く悪天候では飛んでくれない、自衛隊へ要請したが軽井沢上空の積乱雲のため長野へ進入できないという状態、国、村道とも現地へは行ける状態ではないため陸からの救助も不可能だった。平倉トンネルJ、Vの所長、久保田補佐、現場監督員である私と手の打ちようがないまま時

間が流れた。昼12時すぎ、作業員が自力で現場近くのブルドーザーで脱出したとの連絡が入り一安心した。

白馬村小谷間は、村道などを整備し12日中には車一台がやっと通行できる状況になった。小谷村

川尻以北は国道の路線確保のため土砂取り除き作業を順次南側から行った。その夜、小谷村役場へは、池田技師と私が泊まり込み新たな被災の状況把握を行った。

7月13日

朝から災害調査を実施。自分は国道148号川尻以北の調査だった。新たに平倉洞門の護岸が流され基礎が露わになって洞門が傾きつつある状況のため洞門通行止め処置をとった。外沢以北は一昨日の状況からさらに悲惨な状況になっていたが道路の土砂取り除き



光明沢



作業は引き続き行われていた。光明沢はさらに大規模な土石流が発生して、その土砂は国道上を流れ北小谷駅まで達していた。また、北小谷駅は、国道東側の土砂崩落により国道はもとより駅まで土砂で埋め尽くされていた。小谷橋を過ぎて下寺洞門へ。なぜこんなになつてしまうのかと言うほど洞門は派手に破壊されていた。水の威力をまざまざと見せつけられたという感じだった。調査は夜遅くまで続き、三日ぶりに大町の建設事務所に戻る事ができた。

7月14日

再び雨が強くなってきたため、小谷村役場へ詰めて道路・河川の状態把握を行った。川尻以北の土砂流出現場は順次通行が可能となっている状況の中、平倉洞門の復旧には数十日を要するため、4月に貫通した工事中の平倉トンネル（二次覆工のみの状況）を緊急車両に限り通行できるように北側坑口部の擁壁取壊を指示。その後15日16時には通行可能となる。

7月15日以降は度重なる雨の中災害調査等を実施。



H7.7.11 PM6:00 姫川出水状況



管内災害史年譜

管内災害史年譜

過去の災害記録

北安曇郡誌・小谷村史より(記録に残っているものを抜粋)

年	日	災害内容	被害状況
正徳	四年 三月十五日	地震による被災	被災十八戸
享保	一年 九月	浦川上流崩壊	姫川氾濫…来馬被災
文化	六年 一月	大久保地滑り	被災二二戸
文政	七年 二月(四日)	雪崩(李平)	被災六戸、死者七人
文政	七年 二月(七日)	雪崩(李平、白池)	被災二二戸、死者四八人
天保	三年	横川地滑り	(一八三二年)
弘化	四年 三月(四日)	地震による被災	(一八三七年)
文久	三年 五月	大雨による被災	(一八六三年)
元治	一年 七月	大雨による被災	(一八六四年)
明治	五年	清水山地滑り	
明治	八年 四月	大雨による被災	姫川氾濫、李平被災
明治	一〇年 四月 一日	奈良尾地籍地滑り	大網被災
明治	一三年 六月	高瀬川洪水	被災二戸
明治	一三年 七月	奈良尾地籍地滑り	来馬前橋、大網橋流出
明治	一四年 七月	高瀬川洪水	被災九戸
明治	一四年 七月	高瀬川洪水	流失三戸
明治	一五年 九月	大雨による被災	交通杜絶
明治	一五年 九月	大雨による被災	南小谷橋流出
明治	一六年 五月	暴風雨による被災	高瀬川洪水、姫川、中谷川氾濫(川尻橋、石原橋流出)
明治	一七年 五月	高瀬川洪水	姫川氾濫、小土山崩壊
明治	一八年 六月	姫川洪水	奥道・柳瀬橋、月岡橋、親沢橋流出
明治	一八年 春	中土 塩の久保地滑り	堤防欠壊
明治	一九年 一〇月 二日	中土 白岩地滑り	被災十数件
明治	一〇年 八月	柴原平全滅地滑り	被災三戸
明治	一三年 八月	高瀬川・姫川洪水	被災二戸
明治	一四年 六月	中土 道田地滑り	姫川氾濫
明治	一四年 七月	大雨による被災	死者二三名
明治	一四年 八月 八日	神田山崩落	被災四戸
明治	一五年 四月(六日)	中土 高地坂地滑り	被災四戸
明治	一五年 五月(四日)	神田山崩壊	埋没五戸
明治	一五年 七月(二日)	土石流(神田山崩壊による)	埋没五戸
大正	一年 九月	暴風雨による被災	南小谷被災
大正	二年 七月	山入地区地滑り	被災三戸
大正	二年 七月	大雪による被災	被災三戸
大正	八年 二月 二日	雪崩(北小谷島ノ湯温泉)	被災三戸
大正	一〇年 九月	暴風雨被害	被災三戸

わらび平で二戸、峰一戸、千因崎一戸計四戸全壊

大正二年	四月	大正二年	七月
大正四年	七月	大正四年	四月二四日
昭和二年	四月二四日	昭和二年	三月二日
昭和七年	三月二日	昭和七年	一月
昭和八年	一月	昭和八年	二月
昭和九年	二月	昭和九年	一月九日
昭和九年	一月九日	昭和九年	二月九日
昭和九年	二月九日	昭和九年	四月
昭和九年	四月	昭和九年	七月
昭和九年	七月	昭和九年	七月九日
昭和九年	七月九日		
昭和一〇年	八月		
昭和一〇年	九月		
昭和一〇年	一〇月		
昭和一一年	二月		
昭和一一年	三月		
昭和一一年	四月		
昭和一四年	四月		
昭和一五年	四月二二日		
昭和一九年	四月		
昭和二〇年	七月		
昭和二〇年	七月		
昭和二〇年	六月		
昭和二一年	二月一九日		
昭和二二年	四月		
昭和二三年	七月		
昭和二三年	八月		
昭和二四年	二月		
昭和二七年	七月		
昭和二八年	七月		
昭和二八年	六月		
昭和二八年	七月		
昭和二八年	九月		
昭和三二年	四月		

豪雨 姫川洪水、来馬地区の被害大

姫川洪水、宮本橋流失

清水山地滑り

新屋地域地滑り

中土村赤坂地滑り、一万坪を埋没。

同村神久地すべり、中谷川をせき止める。

豪雪（中土積雪五メートル）、融雪（中谷川、土谷川氾濫）

雪崩（北小谷 鷹）

雪崩（北小谷 大平）

清水山地滑り

中土村清水山・白岩地滑り。

降雨、平川堤防決壊、北城村の被害が大きい。

豪雨 中谷川氾濫、橋梁流失

高瀬川の増水により、常盤・南大町駅間の豪堤が欠壊、一五日間列車不通となる。

中土村古池地滑り。

陸郷村宮の平および八丁地滑り。

広津村北山・陸郷村有明地滑り。

中土村太田地滑り。

同村黒倉地滑り。

陸郷村・広津村に地滑り。犬川氾濫。

風吹岳崩壊、山津波を起こし、三日間にわたり泥土を押し出す。

南小谷村風張山崩落し、姫川をせき止め、交通途絶する。

風張山地滑り

中土村外沢下および赤坂崩壊。

七月から十月にかけて四回にわたる洪水あり、小谷四ヶ庄凶作。

大糸線千国・南小谷間の護岸欠壊

洪水、姫川の増水により大糸線白馬大池・千国・南小谷・中土間の護岸が欠壊。

姫川氾濫、第三姫川橋以遠不通

豪雨、平川・松川氾濫。中土村外沢・北小谷村来馬地滑り。

雪崩（北小谷 野地区）

中土村外沢の地滑り止まらず、一四戸中一二戸は他の安全地域へ移転する。死者一名

雷雨のため風吹山泥土を押し出し姫川を止める。

大雨、大糸線不通

中土村清水山地滑り。

郡下各地に水害、死者一名、流出家屋四戸、田畑八百ha、堤防は各所で欠壊、八坂村小松尾では地滑りのため部落全戸倒壊した。その他、陸郷・広津・北城・中土でも地すべりが続出、損害約十億円という。

国鉄大糸線北部の復旧開通には約三か月を要した。

豪雨、八坂村で、地滑り、十三戸五七棟全壊、大糸線北部に被害がある。

高瀬川洪水、常盤村下一木木地滑り。七貫村地滑り。

高瀬川・農具川は氾濫。

台風一三号暴下を通過、池田松川橋破壊、松川・常盤両村の堤防欠壊し、農作物・家屋の被害が大きく、災害救助法の適用を受ける。

南小谷村地滑りのため民家流出。

管内災害史年譜

昭和三四年	七月	集中豪雨。白馬村で、雨量二二・一ミリ、郡下の被害約二億一六百万円に達する。
	八月	大雨、大糸線不通となる。
	二月	小谷村地滑り、大糸線不通。
	三月、四月	小谷村中土地滑り、家屋四棟全壊する。
	七月	平川・松川氾濫、被害四五〇〇万円。大糸線中土、北小谷間の築堤欠壊。
	七月	姫川氾濫、大糸線中土、北小谷間築堤欠壊。
	八月	小谷村に地滑り顕発。
	九月	台風二五号県内を通過し、大町市三億円、白馬村二億円、小谷村一億二千万円、その他の町村にも被害多く、災害救助法が適用される。
昭和三五年	九月一日	台風一五号により大被害、災害救助法が適用される。
	三月	小谷村中土清水山地滑り、四戸全壊、四戸半壊、耕地一四haを失う。
	四月	小谷村南小谷弥太郎地籍地滑り、三戸全壊。移転する。
	八月	台風一八号、二二号通過。被害一億円を超える。
昭和三六年	二月、三月	小谷村地滑り続く。清水山では居住危険となる。
	四月一日	清水山地滑り
	六月、七月	梅雨前線により豪雨が続き、被害が大きい。
昭和三七年	九月一日	台風一八号により戸土分校大破
	二月	美麻村に地滑り。
昭和三八年	七月	美麻村万中山地滑り。
	七月	豪雨、降雹、被害大町分だけで一億円に及ぶ。
昭和三九年	七月	美麻村高地向日地滑り。
	七月二日	九日から豪雨で千国崎護岸欠壊ほか
昭和四〇年	五月、八月	蒲川鉄砲水、蒲川橋流失
昭和四〇年	七月	蒲川氾濫。
昭和四一年	七月二七日	一二日からの豪雨、各所に被害あり。大糸線不通長期化する。
	三月	岩下地籍地滑り
昭和四二年	七月	集中豪雨、池出町崖地区地滑り。
昭和四四年	八月	台風一〇号により、大糸線冠水。不通となる。
昭和四四年	七月一六日	小土地滑り
昭和四四年	八月	九、一〇集中豪雨により各所に被害
	八月	豪雨。一二日の降水量は大町五九・五ミリ、笹平一九六ミリ、神城八五ミリ、に及び格水系に被害が発生した。特に高瀬川の出水により、葛温泉は崩壊状態となり、松川村細野地籍では水田一〇六〇haに浸水被害三七〇〇万円に及ぶ。大糸線不通。
	八月	姫川増水、国道小谷橋西側欠壊通行止め。
	八月	台風一五号による村道等の災害二六カ所
	八月	台風一〇号、土砂崩落、大糸線不通
	八月	豪雪（小谷温泉積雪六メートル）、災害救助法適用
	八月	大雨、積根沢・東親沢氾濫
	八月	大雨、国道不通一四日まで
	八月	樽池で鉄砲水発生、スキー客二名死亡
平成二年	七月、八月	台風一九号で五八戸に被害。被害総額推定一億三百万円余
平成三年	七月二七日	

被災一四戸 被災総額六億円



大町建設事務所職員名簿

大町建設事務所職員名簿

平成7年4月1日～

所長		駒村 佳男	工事第二係長	主査	藤牧 康男
副参事兼次長		伊藤 弘		主任	降幡 成敏
総務課				技師	佐野 龍弘
課長(兼)		伊藤 弘	用地課		
課長補佐庶務係長	主幹運転技師	赤羽 功達	課長		福沢 敏
	主任	西沢 晃孝	課長補佐用地第一係長		牛山 登
	主事	古田 京子		主任	上條 修一
	主事	藤井 仁史		主事	佐藤 修彰
工事事務係長	主査	坂本 英樹		主事	中村 昭司
	主事	藤原 崇喜		主事	森山秀一郎
	主事	荒井 宏治	土地開発公社	主査	山口 清志
	主事	山岸賢一郎	課長補佐用地第二係長		牧内 建律
管理計画課				主任	杉浦 昭利
課長		丸山 文哉		主事	高砂 正實
管理係長	主査	上原 篤夫		主事	北澤 和正
	主任	赤沼 秀幸	土地開発公社	主事	中澤 憲昭
	主事	下條 伸彦		主査	塚田 俊樹
課長補佐計画調査係長		八木沢久人	関連事業課		西沢 康男
技術指導員	主査	仁科 光晴	課長		玉井 隆
	主任	斉藤 隆治	課長補佐関連事業係長		山崎 剛
	技師	飯澤 芳彦		主査	中平 明男
課長補佐維持係長	技師	熊谷 純代		技師	高野 祐一
	主査	上地 端		技師	桐原 正博
	主任	田口 文正		技師	矢口 大輔
	主任	田中 宏人		技師	藤森 哲志
	主任	西沢 昭利		技師	飯田 亨
	技師	高山 久雄		技師	永井雄一郎
	技師	清水 俊喜			
	技師	秋山 大	北安曇土木振興会		
建設課			事務局長		降旗 由
副参事兼課長		山崎 忠宏	次長兼庶務課長補佐	技術課長補佐	萩澤 浩
課長補佐設計第一係長	技師	小宮山照孝		技術係長	佐藤 悦也
	技師	太田 芳樹		主任	吉原 稔
	技師	矢口 泰秀		主事補	北澤 尚泰
	技師	池田 元栄			中村 哲也
課長補佐設計第二係長	技師	上條 光	建設技術センター大町支所		
	技師	久保田周一	次長補佐		滝沢 澄夫
	技師	村松 賢一	次長補佐		市村 登
	技師	池田 雅彦		技師	片桐 崇
課長補佐工事第一係長	主査	岡本 幸弘			
	技師	中沢 敏雄			
	技師	武居 英文			
	技師	深尾 公也			
	技師	忠地 幸博			

平成7年9月1日～

所長 副參事兼次長 総務課 課長(兼) 課長補佐庶務係長 工事事務係長 管理計画課 課長 管理係長 課長補佐計画調査係長 技術指導員 課長補佐維持係長 建設課 副參事兼課長 課長補佐設計第一係長 課長補佐設計第二係長 設計第三係長 課長補佐工事第一係長	主幹運転技師 主任 主事 主事 主査 主事 主事 主事 主査 主任 主事 主任 技師 技師 主査 主任道路技師兼運転技師 主任道路技師兼運転技師 主任道路技師兼運転技師 技師 技師 技師 技師 技師 技師 技師 技師 技師 技師 技師 技師 主査 技師 技師	胸村 佳男 伊藤 弘 伊藤 弘 赤羽 功達 西沢 晃孝 古田 京子 藤井 仁史 坂本 英樹 藤原 崇喜 内山 敏光 荒井 宏治 山岸 賢一郎 丸山 文哉 上原 篤夫 赤沼 秀幸 下條 伸彦 八木沢久人 仁科 光晴 飯澤 芳彦 村松 和彦 熊谷 純代 上地 端 田口 文正 田中 宏人 西沢 昭利 高山 久雄 清水 俊喜 山崎 忠宏 小宮山照孝 太田 芳樹 矢口 泰秀 池田 元柴 上條 光 久保田周一 村松 賢一 池田 雅彦 岡本 幸弘 中平 明男 大塚 新市 増澤 邦彦 太田 雅行 中沢 敏雄 武居 英文 深尾 公也 忠地 幸博	工事第二係長 課長補佐工事第三係長 用地課 課長 課長補佐用地第一係長 土地開発公社 課長補佐用地第二係長 土地開発公社 関連事業課 課長 課長補佐関連事業係長 北安曇土木振興会 事務局長 次長兼庶務課長補佐 建設技術センター大町支所 次長補佐 次長補佐	主査 主任 技師 主任 技師 技師 主任 主事 主事 主事 主査 主任 主事 主事 主事 主査 主査 技師 技師 技師 技師 技師 技師 技師	藤牧 康男 降幡 成敏 佐野 龍弘 桐沢善三郎 石坂 文彦 福島 岳史 矢澤 祥道 福沢 敏 牛山 登 上條 修一 佐藤 修彰 中村 昭司 森山秀一郎 山口 清志 牧内 建律 杉浦 昭利 高砂 正實 北澤 和正 中澤 憲昭 塚田 俊樹 西沢 康男 玉井 隆 山崎 剛 斉藤 隆治 高野 祐一 桐原 正博 矢口 大輔 藤森 哲志 飯田 亨 永井雄一郎 降旗 由 荻澤 浩 佐藤 悦也 吉原 稔 北澤 尚泰 中村 哲也 滝沢 澄夫 市村 登 片桐 崇
--	---	--	---	--	---

平成9年4月1日～

所長 調整幹兼次長		駒村 佳男 駒村 和久		技師 技師	福島 岳史 川上 忠宏 高橋 英夫 平林 英治 深尾 公也 忠地 幸博
総務課			課長補佐工事第一係長		
課長(兼) 課長補佐庶務係長	主幹運転技師 主事 主事 主事	駒村 和久 大月 博文 西沢 晃孝 藤井 仁史 坂本 英樹 藤井 知代 横山 芳弘 内山 敏光 荒井 宏治 小澤 勝	専門幹兼課長補佐 工事第二係長	主査 技師 技師	
課長補佐工事事務係長	主任 主事 主事		課長補佐工事第三係長	主査 技師 技師 主任 技師 技師 技師	百瀬 一雄 湯沢 秀人 石坂 公成 佐野 龍弘 桐沢善三郎 石坂 文彦 大塚 新市 北原 誠 太田 雅行 矢澤 祥道
管理計画課					
課長 管理係長	主査 主査 主事	吉沢 俊夫 山本 等 時田 信之 倉石 博之 荒井 孝幸 野村 幸男 宮島 芳保 村松 和彦 熊谷 純代 斉藤 隆治 飯澤 芳彦 矢口 大輔 藤森 哲志 田中 勝己 田口 文正 田中 宏人 西沢 昭利 高山 久雄 西沢 幸高 西山 広一 清水 俊喜	用地課		
課長補佐計画調査係長 技術指導員	主査 技師 技師		課長 課長補佐用地第一係長	主査 主任 主事 主事	清澤 仁一 長橋 久夫 傘木 一彦 上條 修一 山口 清志 岩野 健一 大沢 千尋 高砂 正實 中澤 秀二 塚田 俊樹 松堀 悟
課長補佐関連事業係長	主任 技師 技師		課長補佐用地第二係長	主査 主事 主事 次長補佐	
課長補佐維持係長	主査 主査 主任 主任 主任 道路技師兼運転技師 道路技師兼運転技師 技師 技師		土地開発公社		
建設課			北安曇土木振興会		
課長 課長補佐設計第一係長		塚田 一久 内川 実 山本 浩二 増澤 邦彦 池田 元榮 永井雄一郎 久保田周一 村松 賢一	事務局長兼庶務課長補佐 次長兼技術課長補佐 技術係長	主査 主事	荻澤 浩 佐藤 悦也 吉原 稔 北澤 尚泰 中村 哲也
課長補佐設計第二係長	技師 技師 技師 技師 技師		建設技術センター大町支所 次長	技師	横谷 陽 西尾 忠信



新聞報道

責任編集：櫻田三郎
大野タイムス

大北北部に集中豪雨

交通、通信網ズタズタ

国県村道各所で不通 JR運休

十一日午後、大北北部に集中豪雨が降り、大北地方の交通、通信網はズタズタとなった。JRは、大北地方の線路が不通となり、大北地方の列車は運休となった。また、国県村道各所で不通となり、大北地方の交通は寸断された。通信網も、大北地方の線路が不通となり、大北地方の通信は寸断された。

一部孤立状態も

小谷村土砂崩落や冠水

小谷村は、豪雨による土砂崩落や冠水により、一部が孤立状態となった。また、小谷村の土砂崩落や冠水により、小谷村の交通は寸断された。通信網も、小谷村の線路が不通となり、小谷村の通信は寸断された。



白馬ハイランドホテルの裏山が崩れ建物の一部埋没

白馬村で96人避難

護岸決壊や土砂崩れ

白馬村では、豪雨による護岸決壊や土砂崩れにより、96人が避難した。また、白馬村の護岸決壊や土砂崩れにより、白馬村の交通は寸断された。通信網も、白馬村の線路が不通となり、白馬村の通信は寸断された。



白馬村小谷近くでは道路にも土砂が崩れ不通

信濃大町以北運休

JR 信濃大町以北運休



水が増した松川

大系タイムス H7.7.13

小谷白馬の被害拡大

大北北部 豪雨災害

大雨ようやく小休止

避難観光客らへりで救出

大雨はようやく小休止したが、大北北部の豪雨災害は拡大している。避難した観光客らへりで救出された。また、大北北部の豪雨災害により、大北北部の交通は寸断された。通信網も、大北北部の線路が不通となり、大北北部の通信は寸断された。

国道、JR依然不通

住宅小谷・白馬で107戸に

国道、JR依然不通。住宅小谷・白馬で107戸に。また、国道、JR依然不通。住宅小谷・白馬で107戸に。また、国道、JR依然不通。住宅小谷・白馬で107戸に。

家屋埋める土砂

小谷北部依然孤立状態

家屋埋める土砂。小谷北部依然孤立状態。また、家屋埋める土砂。小谷北部依然孤立状態。また、家屋埋める土砂。小谷北部依然孤立状態。



洪水で流され人入様の様相



崩壊した道路一小谷村白馬駅前近



土砂の浸食で家も埋もった状態の中土曜付近

大系タイムス H7.7.14

依然400人余が避難所に 小谷村

長びく道路の復旧

寸断された中土、北小谷



教室は足元から転落し遺構も寸断—小谷村中土

大北北谷を隔った中土・北小谷は、小谷村、白根村などで被害が大きい。小谷村は、土砂崩れで、土砂が溜まり、ライフラインも断たれ、避難所が不足している。各地で交通が寸断された小谷村では、十四日正午現在、十九人が避難所を離れて四百五十五人が避難所生活を続けている。

小谷村では十四日午前十一時二十五分、緊急車両の巡回が停止して停泊していた。被災者の避難所が再び崩壊し、通行止めとなった。また緊急車両は土砂がまたがる区間1.4キロメートルを迂回して復旧作業に取り掛かっている。

村長西村昭太郎は、中土・北小谷方面は十四日午前十一時現在、北小谷駅付近の三ヶ村で再び土砂崩れがあり、下里・中土・中土の間に通行止めの状態。村内の避難所にも土砂が溜まり、中土・北小谷の主要道路は寸断されている。避難所生活が長びく状態となっている。

中土方面は、土砂崩れにより、谷川が土砂崩れにより使用できない状態。清水山を迂回して中土まで通行することはできない。それ以外の小谷村方面は、道路が崩壊している。中土の支流で中土を流れる谷川が暴雨のため急激となり、道路下の地面を削り、道路が崩壊した。道路が寸断された。



土砂崩れで大赤線は切断—小谷村白馬大池駅付近

一部の沢が警戒状態に

大町市では、国市対策本部によると、中土・北小谷は、土砂崩れで、土砂が溜まり、中土・北小谷の主要道路は寸断されている。避難所生活が長びく状態となっている。

中土方面は、土砂崩れにより、谷川が土砂崩れにより使用できない状態。清水山を迂回して中土まで通行することはできない。それ以外の小谷村方面は、道路が崩壊している。中土の支流で中土を流れる谷川が暴雨のため急激となり、道路下の地面を削り、道路が崩壊した。道路が寸断された。

一部の沢が警戒状態に

大町市では、国市対策本部によると、中土・北小谷は、土砂崩れで、土砂が溜まり、中土・北小谷の主要道路は寸断されている。避難所生活が長びく状態となっている。

中土方面は、土砂崩れにより、谷川が土砂崩れにより使用できない状態。清水山を迂回して中土まで通行することはできない。それ以外の小谷村方面は、道路が崩壊している。中土の支流で中土を流れる谷川が暴雨のため急激となり、道路下の地面を削り、道路が崩壊した。道路が寸断された。

大系タイムス H7.7.15

道路復旧最優先に

吉村 小谷村視察し激励

吉村千良知知事は十八日、白根地域の松沢橋に日、災害発生後初めて小谷村視察し、被災者への激励と、道路復旧の最優先を訴えた。被災者への激励と、道路復旧の最優先を訴えた。



小谷村で被害状況視察する吉村知事

「一日も早く通常の生活に戻れるよう努力します」と、歩を回し、約八人が、被災者への激励と、道路復旧の最優先を訴えた。被災者への激励と、道路復旧の最優先を訴えた。

「一日も早く通常の生活に戻れるよう努力します」と、歩を回し、約八人が、被災者への激励と、道路復旧の最優先を訴えた。被災者への激励と、道路復旧の最優先を訴えた。

大系タイムス H7.7.20

平成7年7月11日～12日にかけての梅雨前線豪雨

寸断の交通 復旧急ぐ

大糸線 一部開通へ

東北部 全半壊家屋は74棟に

【北信濃】大糸線小谷駅付近、大雨の被害に遭った大糸線の復旧作業が急がれている。全半壊の家屋は74棟に達している。大糸線は、大糸川沿いにあり、全半壊の家屋は74棟に達している。大糸線は、大糸川沿いにあり、全半壊の家屋は74棟に達している。



小谷に災害 救助法適用
大糸線は、大糸川沿いにあり、全半壊の家屋は74棟に達している。大糸線は、大糸川沿いにあり、全半壊の家屋は74棟に達している。

洞門 復旧 来年か

飯山線は きょう運行再開



【北信濃】飯山線は、大雨の被害に遭った大糸線の復旧作業が急がれている。全半壊の家屋は74棟に達している。大糸線は、大糸川沿いにあり、全半壊の家屋は74棟に達している。

信濃毎日新聞 H7.7.18

信濃毎日新聞 H7.7.16

なお80人 避難生活

小谷村の 小谷小の避難所で健康心配



北小谷小の避難所で健康を心配して食事に向かうお年寄りたち

【北信濃】小谷村の避難生活が続いている。避難生活が長期化するにつれて、お年寄りの健康が心配されている。避難生活が長期化するにつれて、お年寄りの健康が心配されている。

信濃毎日新聞 H7.7.19

北小谷へのルート確保

豪雨災害 進む復旧



【北信濃】北小谷へのルート確保が進んでいる。豪雨災害の復旧作業が急がれている。全半壊の家屋は74棟に達している。大糸線は、大糸川沿いにあり、全半壊の家屋は74棟に達している。

信濃毎日新聞 H7.7.15

経川水位上がり 道路工事を中断

【北信濃】経川水位が上がり、道路工事を中断している。経川水位が上がり、道路工事を中断している。

信濃毎日新聞 H7.7.21

孤立小谷の大網 姫川温泉 お盆前 仮道と確保



【北信濃】孤立小谷の大網、姫川温泉にお盆前の仮道確保が進んでいる。孤立小谷の大網、姫川温泉にお盆前の仮道確保が進んでいる。

信濃毎日新聞 H7.7.26

大雨で被害 小谷の中谷川復旧

「魚すみやすい川に」



大野建設事務所「自然再生化した河川復旧」を説明する中谷川の児童

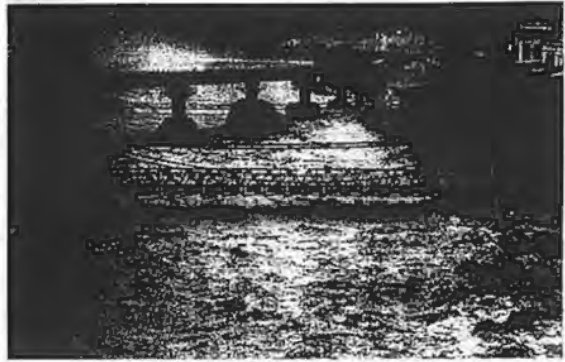
平成三年三月一日「NEWS24」で、中谷川が「魚すみやすい川」に再生されたことが紹介された。その再生には、大野建設事務所が「自然再生化した河川復旧」に取り組んでいる。この再生には、大野建設事務所が「自然再生化した河川復旧」に取り組んでいる。この再生には、大野建設事務所が「自然再生化した河川復旧」に取り組んでいる。

信濃毎日新聞 H8.10.29

岸は石や木にして

地小 五年生が県に要望

昨年七の豪雨で被害を受けた中谷川を再生させるため、地小五年生が県に要望を出している。彼らは、川岸に石や木を植えることで、川を魚がすみやすい川に再生してほしいと訴えている。



つじ橋のすぐ下流で迫る棚川の濁流。向かって右側が孤立状態の小谷村小谷川濁流 (25日午後2時半ごろ)

大雨の小谷災害復旧に痛手

重機なぎ倒す濁流

孤立の住民 不安な一夜

大雨による洪水で、小谷村の住民は孤立状態に陥っている。濁流が重機をなぎ倒し、復旧作業が中断している。住民たちは、一夜を不安に過ごしている。

信濃毎日新聞 H8.6.26

足止め温泉客下山

大雨小谷土砂除去作業進む

大雨による洪水で、小谷村の温泉客は下山を余儀なくされている。土砂除去作業が進んでいるが、足止めが続いている。



温泉客から観光客ら、(北安曇郡小谷村)

信濃毎日新聞 H8.6.26

この日は、温泉客らから観光客らまで、小谷村に滞在している。大雨による洪水で、小谷村の温泉客は下山を余儀なくされている。土砂除去作業が進んでいるが、足止めが続いている。温泉客らは、下山を余儀なくされている。土砂除去作業が進んでいるが、足止めが続いている。

土砂崩れで14人不明に

小谷一糸魚川境の県境



大規模な土石流で14人が行方不明となった被災の現場。懸命の救出作業が続く

災害 工事現場襲う 復旧

消防団員ら懸命の救出作業

六日前十時五十分ごろ、新潟県境の小谷村蒲原沢の災害復旧工事現場で土砂崩れが発生。村役場によると同日午後一時至五時、十四人が行方不明となり、大町消防団元消防団が救助活動にあたった。

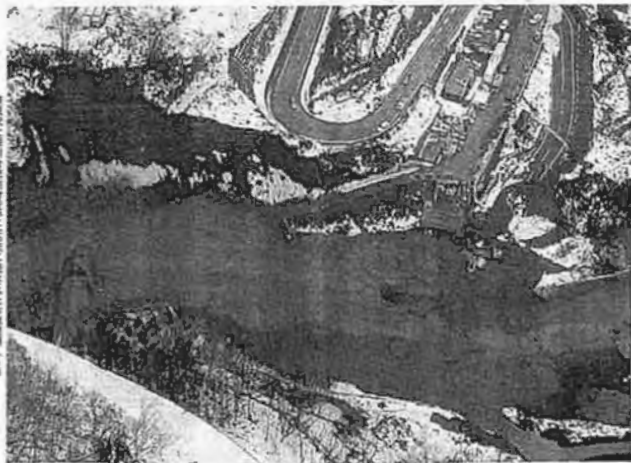
現場は園児付近で、鉄砲水が原因とみられ約二百メートルにわたって土砂が埋まり、生き埋めになったとみられるのは十五人で、一人は救出されたが、同村の今井工務店一人、新潟県の大庄建設三人、鹿角工業七人、作業員計十四人の行方が不明となっている。また、十数人がけがをし、白土村や新開町の病院に収容されたほか、対策には数千人が取り巻かれたらしい。

小谷村に 対策本部

土砂崩れが起きた小谷村は、消防団員らによる救出作業が続いている。小谷村に対策本部が設置され、消防団員らによる救出作業が続いている。小谷村に対策本部が設置され、消防団員らによる救出作業が続いている。

大系タイムス H8.12.6

襲う濁流 安否は…



信濃毎日新聞 H8.12.6

住宅ほどの巨大な岩

小谷 懸命の救出作業

小谷村に土砂崩れが発生し、住宅が襲われる。救出作業が続いている。巨大な岩が崩れ落ち、住宅を襲った。救出作業が続いている。



災害査定表

第2次査定

単位：千円

査定番号	路河川名	位置	申請額	決定額	実施額	復旧長(m)
336	(一) 幸納中土(停)線	北安曇郡小谷村 幸納	122,422	60,405	66,474.9	109.5
337	(一) 幸納中土(停)線	北安曇郡小谷村 曾田上	1,581	1,555	1,939.3	44.0
338	(一) 幸納中土(停)線	北安曇郡小谷村 犬川	22,537	20,791	19,576.2	27.0
339	(一) 幸納中土(停)線	北安曇郡小谷村 石原	4,488	3,528	3,094.6	21.5
一般県道 幸納中土(停)線 合計			150,848	86,279	91,085.0	
340	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 大又橋上	8,546	8,636	8,144.3	43.0
341	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 知喰橋下	1,599	1,588	1,338.1	16.0
342	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 知喰橋上	5,140	4,816	4,014.6	14.0
343	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 高地下1号	8,535	8,535	8,050.2	12.0
344	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 高地下2号	3,019	3,019	2,509.2	15.0
345	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 高地上	5,211	3,897	3,042.4	9.0
346	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 柱1号	10,003	9,522	13,782.4	23.0
347	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 柱2号	5,295	3,895	2,948.9	16.0
348	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 柱3号	6,521	6,493	5,301.8	17.0
349	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 柱4号	4,256	4,083	3,346.3	17.0
350	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 新田上	1,071	1,071	1,160.7	10.0
351	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 境橋前	3,134	3,134	3,365.3	15.0
352	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 境橋下	3,451	3,451	3,262.1	12.0
353	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 稲尾上	5,247	3,067	3,230.7	12.0
354	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 稲尾中	15,470	17,775	17,689.9	63.0
355	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 居谷里入口	5,155	2,975	2,791.5	8.0
356	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 居谷里入口下	2,649	2,649	2,833.3	8.0
357	(一) 小島信濃木崎(停)線	北安曇郡美麻村 稲尾	11,290	10,013	9,744.1	35.2
一般県道 小島信濃木崎(停)線 合計			105,962	98,619	98,546.8	
358	(一) 川口大町線	北安曇郡八坂村 郡界	6,092	6,092	5,750.1	39.0
359	(一) 川口大町線	北安曇郡美麻村 中の貝下	1,988	1,988	2,226.9	16.0
360	(一) 川口大町線	北安曇郡美麻村 大塩	5,187	4,897	4,704.6	25.5
一般県道 川口大町線 合計			13,267	12,977	12,681.6	
361	(一) 千国北城線	北安曇郡小谷村 千国	3,081	2,379	1,871.3	33.0
362	(一) 千国北城線	北安曇郡小谷村 沓掛下	13,820	13,820	11,867.0	160.0
363	(一) 千国北城線	北安曇郡小谷村 千国橋	63,756	44,406	41,307.1	63.0
364	(一) 千国北城線	北安曇郡小谷村 沓掛1号	6,107	5,919	4,223.9	14.0
365	(一) 千国北城線	北安曇郡小谷村 沓掛2号	4,158	3,099	2,331.6	14.0
366	(一) 千国北城線	北安曇郡白馬村 瀬戸上	2,028	2,028	2,310.4	16.0
367	(一) 千国北城線	北安曇郡白馬村 瀬戸下	22,067	20,544	20,114.9	68.0
368	(一) 千国北城線	北安曇郡白馬村 瀬戸橋上	7,512	4,401	3,889.2	23.5
一般県道 千国北城線 合計			122,529	96,596	87,935.4	
369	(一) 美麻八坂線	北安曇郡美麻村 湯の梅	2,639	2,456	2,174.8	22.0
一般県道 美麻八坂線 合計			2,639	2,456	2,174.8	
370	(一) 舟場矢下線	北安曇郡八坂村 布川	5,107	3,537	2,843.9	15.4
371	(一) 舟場矢下線	北安曇郡八坂村 布川上	6,286	5,974	5,217.2	16.0
372	(一) 舟場矢下線	北安曇郡八坂村 中学校下	22,726	20,388	26,958.0	24.5
373	(一) 舟場矢下線	北安曇郡八坂村 一ノ瀬	2,978	2,978	2,530.1	16.0
一般県道 舟場矢下線 合計			37,097	32,877	37,549.2	
(道路) 一般県道合計			823,473	658,207	622,465.	
道路災害合計			1,803,657	1,445,886	1,418,567.9	
467	(主) 扇沢大町線	大町市 白沢橋	9,725	8,700	8,668.1	29.7
468	(主) 扇沢大町線	大町市 鹿島大橋	36,643	33,992	38,055.7	64.1
(橋梁) 主要地方道合計			46,368	42,692	46,923.8	
橋梁災害合計			46,368	42,692	46,923.8	
河川災害合計			3,782	7,219	7,341.3	
道路災害合計			1,803,657	1,445,886	1,418,567.9	
橋梁災害合計			46,368	42,692	46,923.8	
2次査定災害合計			1,853,807	1,495,797	1,470,833.0	

平成7年7月11日～12日にかけての梅雨前線豪雨に伴う 災害査定箇所一覧表(大町建設事務所)

第4次査定

単位：千円

査定番号	路河川名	位 置	申請額	法定額	実施額	復旧長(m)		
1.938	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 姫川温泉	3,420,404	3,261,169	4,017,670.0	2,000.0	分 冊	
1.939	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 湯原	1,263,826	915,296	887,129.4	834.0		
1.940	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 大網取水口下	399,998	138,736	155,706.1	394.0		
1940-1	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 大網取水口2		25,968	18,076.7	10.0		
1.941	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 来馬	3,413,433	6,067,129	2,622,522.3	3,200.0		
1.942	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 姫川橋踏切横	770,956	755,466	892,509.3	685.0		
1.943	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 川尻洞門右岸	141,559	141,559	139,910.4	190.0		
1.944	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 南小谷駅下	37,691	26,571	32,860.8	117.0		
1.945	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 坪の沢鉄橋下	246,204	181,366	155,941.7	240.0		
1.946	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 ダム下	76,329	60,502	65,342.1	185.0		
一級河川 姫川 合計			9,770,400	8,573,492	8,987,668.8			
1.947	(一) 土谷川	北安曇郡小谷村 太田	46,150	27,351	25,946.8	113.0		
一級河川 土谷川 合計			46,150	27,351	25,946.8			
1.948	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 黒倉橋下	142,525	116,496	119,278.6	180.0		
1.949	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 黒倉橋上	119,900	99,058	101,463.7	250.0		
1.950	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 藤掛	87,716	79,625	81,547.2	152.0		
1.951	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 中土	2,533,387	2,390,820	2,454,332.8	2,250.0		
1.952	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 戸石	218,995	191,357	204,494.6	309.0		
1.953	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 真木	1,410,176	1,145,296	1,180,044.8	2,510.0		
1.954	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 熱湯上	147,707	105,166	96,025.8	104.4		
1.955	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 大なで下	72,880	43,443	34,991.6	208.1		
1.956	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 押立	106,556	106,556	86,115.5	274.0		
1.957	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 葛草蓮下	148,021	131,293	126,649.9	287.0		
1.958	(一) 中谷川	北安曇郡小谷村 熱湯	147,769	99,036	112,914.5	75.7		
一級河川 中谷川 合計			5,135,632	4,508,146	4,597,859.0			
1.959	(一) 高瀬川	北安曇郡池田町 十日市場	55,617	55,341	48,960.8	87.3		
一級河川 高瀬川 合計			55,617	55,341	48,960.8			
(河川) 一級河川合計			15,007,799	13,164,330	13,660,435.4			
河川災害合計			15,007,799	13,164,330	13,660,435.4			
2.040	(主) 北安曇郡小谷川	北安曇郡小谷村 白岩	35,680	34,248	31,919.5	118.0		
2.041	(主) 北安曇郡小谷川	北安曇郡小谷村 大なで4号洞門	25,795	25,795	22,059.1	102.5		
(道路) 一般県道合計			61,475	60,043	53,978.6			
道路災害合計			61,475	60,043	53,978.6			
2.049	(国) 148号	北安曇郡小谷村 国界橋	20,923	20,923	19,990.4	48.1		
2.050	(国) 149号	北安曇郡小谷村 新国界橋	349,623	334,806	400,393.0	110.0		
(橋梁) 国道合計			370,546	355,729	420,383.4			
橋梁災害合計			370,546	355,729	420,383.4			
河川災害合計			15,077,799	13,164,330	13,660,435.4			
道路災害合計			61,475	60,043	53,978.6			
橋梁災害合計			370,546	355,729	420,383.4			
4次査定災害合計			15,439,820	13,580,102	14,134,797.4			

第5次査定

単位：千円

査定番号	路河川名	位 置	申請額	法定額	実施額	復旧長(m)
3.315	(一) 姫川	北安曇郡小谷村 北小谷	5,044,858	4,606,269	4,594,714.0	4,150.0
(河川) 一級河川合計			5,044,858	4,606,269	4,594,714.0	
河川災害合計			5,044,858	4,606,269	4,594,714.0	
河川災害合計			5,044,858	4,606,269	4,594,714.0	
道路災害合計						
橋梁災害合計						
5次査定災害合計			5,044,858	4,606,269	4,594,714.0	

編集後記

平成7年7月、日本海沿岸上空に停滞していた梅雨前線が活発化し、今までにない記録的な豪雨が長野県北部一帯を襲い、管内では北安曇郡小谷村を中心に発生した未曾有の大災害から2年8ヶ月の歳月が経ちました。

私達は至るところで寸断された道路、堤防の欠壊、見るも無残に壊れた構造物、多量の土砂の流出など想像を絶する被害に驚く暇もなく、主要路線の交通確保や被害の拡大防止など応急工事を急ぎ、国をはじめ関係各機関との協議・調整、そして数次に至る査定を経て合計400カ所を超える工事箇所を発注し早期復旧に努めてまいりましたが、今般、改良復旧工事の一部を残し完了する運びとなりました。

そこで、今回の災害復興の記録を後世に残そうと記念誌を刊行することになり、所内各課より編集委員を選出し、第一回編集委員会がスタートしたのは平成9年11月12日でした。時はまさにオリンピッククワータ冬季競技大会を数ヶ月後に控え多忙な日々が続く最中のため、時間的制約がありましたがお陰様でここに作業を終え、発刊にこぎつけることが出来ました。この間、ご多忙にもかかわらず手記をお寄せいただきました方々、貴重な写真や資料をご提供いただきました方々に対しまして心からお礼を申し上げます。

最後に、災害復旧事業に携わられました関係各位に対しまして深く感謝申し上げますとともに、今後、益々のご活躍をお祈り申し上げます。

平成10年3月

編集委員長

塚田 一久



災害復興記念誌編集委員

顧問

駒村 佳男
駒村 和久

編集委員長
副編集長

塚田 一久
大月 博文
横山 芳弘
久保田周一

編集委員

桐沢善三郎
内山 敏光
藤井 仁史
矢口 純代
石坂 文彦
大塚 新市
村松 賢一
増澤 邦彦
上條 修一

H7.7.11梅雨前線豪雨災害復興の記録
「激災を乗り越えて」

一九九八年三月発行

発行責任者

長野県大町建設事務所

〒398-0002 長野県大町市大字大町一〇五八―二

TEL0261-22-5111

編集

株式会社 ジャステック(本社)

〒395-0804 長野県飯田市鼎名古熊二五三九―一

TEL0265-24-1700

株式会社 ジャステック(松本営業所)

〒390-1243 長野県松本市大字神林一四八九―一

TEL0263-85-6113

印刷

株式会社 総合印刷

〒399-0701 長野県塩尻市広丘吉田六五九―一

TEL0263-57-4556

